

2006年

第18回

戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集《第13集》

大東亜戦争における地域別兵員及び死没者概数

厚生省援護局
昭和39年3月1日作成
防衛研修所戦史室
昭和42年7月複製

事 項 地 域		陸 軍				海 軍				計			
		昭20.8.15 現存兵員数	死 昭12.7.7~ 昭20.8.14	没 昭20.8.15~	者 計	昭20.8.15 現存兵員数	死 昭12.7.7~ 昭20.8.14	没 昭20.8.15~	者 計	昭20.8.15 現存兵員数	死 昭12.7.7~ 昭20.8.14	没 昭20.8.15~	者 計
日 本 本 土 (含 周 辺)		2,372,700人	58,100人	0人	58,100人	1,962,800人	41,800人	4,000人	45,800人	4,335,500人	99,900人	4,000人	103,900人
小 笠 原 諸 島		15,000	2,700	0	2,700	8,600	12,400	100	12,500	23,600	15,100	100	15,200
沖 縄 諸 島	本 島	12,100	50,300	300	50,600	1,500	11,300	200	11,500	13,600	61,600	500	62,100
	そ の 他	28,800	17,300	0	17,300	9,700	10,000	0	10,000	38,500	27,300	0	27,300
	計	40,900	67,600	300	67,900	11,200	21,300	200	21,500	52,100	88,900	500	89,400
台 湾		128,100	27,200	1,300	28,500	62,400	10,200	400	10,600	190,500	37,400	1,700	39,100
朝 鮮	南 部	200,200	8,800	900	9,700	33,300	6,100	100	6,200	233,500	14,900	1,000	15,900
	北 部	94,000	2,700	7,200	9,900	8,400	500	200	700	102,400	3,200	7,400	10,600
	計	294,200	11,500	8,100	19,600	41,700	6,600	300	6,900	335,900	18,100	8,400	26,500
樺太・千島 (含アリュウシャン)		88,000	7,900	300	8,200	3,000	3,100	100	3,200	91,000	11,000	400	11,400
満 洲		664,000	26,000	19,900	45,900	1,500	500	300	800	665,500	26,500	20,200	46,700
中 国 本 土 (含 香 港)		1,055,700	385,200	50,400	435,600	69,200	19,400	700	20,100	1,124,900	404,600	51,100	455,700
シ ベ リ ヤ		0	0	52,300	52,300	0	0	400	400	0	0	52,700	52,700
小 計		4,658,600	586,200	132,600	718,800	2,160,400	115,300	6,500	121,800	6,819,000	701,500	139,100	840,600
中 部 太 平 洋 諸 島		48,600	91,000	4,800	95,800	58,300	149,500	1,900	151,400	106,900	240,500	6,700	247,200
フ ィ リ ピ ン		97,300	362,700	8,800	371,500	29,900	117,900	3,200	121,100	127,200	486,600	12,000	498,600
仏 領 印 度 支 那		30,400	6,100	1,800	7,900	7,800	4,400	100	4,500	98,200	10,500	1,900	12,400
タ イ		106,000	4,800	2,100	6,900	1,500	100	0	100	107,500	4,900	2,100	7,000
ビ ル マ (含 印 度)		70,400	160,400	2,600	163,000	1,100	1,500	0	1,500	71,500	161,900	2,600	164,500
マ ラ イ ・ シ ン ガ ポ ル		84,800	6,900	1,600	8,500	49,200	2,600	300	2,900	134,700	9,500	1,900	11,400
ア ン ダ マ ン ・ ニ コ バ ル		10,700	700	200	900	500	1,500	0	1,500	11,300	2,200	200	2,400
ス マ ト ラ		59,500	2,000	700	2,700	100	500	0	500	59,600	2,500	700	3,200
ジ ャ ワ		40,400	2,200	500	2,700	9,700	3,500	300	3,800	50,100	5,700	300	6,000
小 ス ン ダ		17,500	51,600	200	51,800	3,000	1,100	100	1,200	20,500	52,700	300	53,000
ボ ル ネ オ		18,600	10,400	900	11,300	10,900	5,200	1,500	6,700	29,500	15,600	2,400	18,000
セ レ ベ ス		17,700	1,300	200	1,500	8,800	3,900	100	4,000	26,500	5,200	300	5,500
モ ル ツ カ		51,900	1,800	800	2,600	19,400	1,500	300	1,800	71,300	3,300	1,100	4,400
ニ ュ ー ギ ニ ヤ		30,200	110,000	2,400	112,400	3,600	15,100	100	15,200	33,800	125,100	2,500	127,600
ビ ス マ ル ク 諸 島		57,500	15,900	3,800	119,700	38,900	10,100	700	10,800	96,400	26,000	4,500	30,500
ソ ロ モ ン 諸 島		12,300	62,300	900	63,200	12,800	24,100	900	25,000	25,100	26,400	1,800	28,200
小 計		813,800	896,100	32,300	119,700	256,300	342,500	9,500	352,000	1,070,100	1,238,600	41,800	1,280,400
合 計		5,472,400	1,482,300	164,900	1,647,200	2,416,700	457,800	10,000	473,800	7,889,100	1,940,100	180,900	2,121,000

- (注) 1. 本表は、もとの陸海軍に属していた軍人及び軍属を対象としている。
 2. 本数字には、各地域ともそれぞれの近海域の数が含まれている。
 3. 本数字には、支那事変関係死没者(陸軍181,000人、海軍7,700人)が含まれている。
 4. 本数字には、朝鮮人及び台湾人が含まれている。

5. 昭20.8.15以降死没者数には、戦時死亡宣告により死亡とみなされた者及びその見込みのある者が含まれている。
 6. 死没者欄には、在郷死者は含まれていない。

ところ 緑生涯学習センター
 月・日 平成18年7月8日
 戦争体験を語り継ぐ会実行委員会

◎ 発刊のことば

戦争体験記録集「第十三集」発刊にあたり、今年も十八名の方から寄稿を戴き、ありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

昭和二十年八月十五日敗戦から六十一年を迎え、年配の方からは戦時・戦後の生々しい体験を綴ってもらいました。

中学生達は祖父母から、また、ご近所の方より直接話を聞き、感性豊かにまとめ、しっかりご自身の意志を現しておられ、ご指導をなされた先生に敬意を表わします。

戦争体験をされた皆さんには風化させないため、どうか若い世代の人たちに語ったり、記録を残しておいて欲しいと切に願います。

この記録集が世代を越えた交流の『場』づくりとなるよう、編集者一同今後とも挑戦してまいります。

目次

警察署裏で人糞を焼く(少年期Ⅱ)	橋詰 四郎	一頁
平和憲法は父からのプレゼント	江間万里子	五頁
祖父母たちの太平洋戦争	伊藤ゆきの	七頁
祖父母たちの太平洋戦争	近藤かおる	九頁
祖父母たちの太平洋戦争	浅井 純	一四頁
祖父母たちの太平洋戦争	加賀 元貴	一五頁
祖父母たちの太平洋戦争	伊藤 晴香	一六頁
祖父母たちの太平洋戦争	近藤 一輝	一七頁
戦争は一人息子も長男も兵隊に	福井 清	一八頁
幾度も地獄から助けられる	山岡 三夫	二一頁
軍国愛国少年の現在	佐藤 謙治	二六頁
六十年目の終戦の日に生会えて	住田 豊信	二八頁
戦争展から思う「平和」と言うこと	大川 孝次	三五頁
戦禍の下五歳児の刻印	多田代志子	三七頁
女学生の戦争体験	能村とし子	三九頁
支那事変の最初を戦う	木下 秀麿	四〇頁
大空に散った若桜	木場英一郎	四三頁
お国のために	鳥山 進	四五頁

警官寮署裏で人糞を焼く（少年期Ⅱ）

橋詰 四郎

私は戦争と恐怖の暗黒時代、三人の大元帥に翻弄された青春だった。

1940（昭和十五年）から1944（昭和十九年）七月まで、東京都品川区五反田大崎警察署の裏門に通じる道が、私達の住む下宿屋が裏口に面した二階の六畳と八畳を区切る唐紙を取り払った部屋に、徴兵適齢前（満二十歳に達する前）の男ばかり四、五人と、徴兵検査を受け、軍隊にも行けない弱い体の二十二歳のMを暗黙の部屋頭で共同生活をしていた。時代は太平洋戦争の真っ只中、男は戦闘帽にゲートル。女はモンペの時代なのにMは和服の着流しで、定職もなく千葉県の実家からの仕送りで生活し、得度も知れぬが、年下の私達はなんとなくMを尊敬していた。

下宿は、入浴は銭湯、三食外食、私達全員朝食抜き。これは食料難でなく朝食抜きの習慣で、朝食を食べず、昼ご飯まで持ちこたえていた。米穀券は一月全券食堂に前渡しして、一日二食だから食堂の主人はよくしてくれた。またこの下宿は私の入居前から、大崎警察署のお巡りさんの隠れ昼寝場所にも利用され、私達は近所の人にも大崎警察署のお巡りさんにも、名前でなく一括「岡田のあんちゃん」と呼ばれ、それで通用していた。

1943（昭和十八年）このMに召集令状（赤紙）が来て、クリスマスの日私達は山手線五反田駅で万歳万歳と隣組の人達と見送った。が、年が明けてMが帰ってきた。なんでも入隊した日に殴られ気絶し陸軍病院に入院、二週間目に除隊させられたと云うのだ。家主の岡田は今迄通り仲良く私達に伝えた。が、町内の理髪店や隣のクリーニンング屋は、Mは特高（特別高等警察）思想、政治活動の取締りが目的、憲兵と共に国民には恐怖の存在であった。だと思われていたようだった。

Mの話によると田舎では（東京では大阪以外を全部田舎と呼ぶ会話であった）この非常時に天皇陛下のお役にも立てない非国民呼ばわりで、隠遁しているらしいのが本当らしい。私達はMに年末から年始二週間ではなく、足掛け二年軍隊にいたのだからもっと威張って下さい。と、大真面目で話していた。

二十歳前の男が四、五人も居れば、硬派も居るし軟派もいる。銀座派も居れば浅草派も居る。日曜日銀座派が、日劇ダンシングチームを見に行き、開演前に並んでいた全員、憲兵が来て皇居前広場に引率され、皇居広場の雑草抜きを一日中させられたと怒って帰って来たこともあった。

浅草派が粗悪紙のプログラムを見せ〇〇館で、今で言うパンチのある歌い方をする笠置シズ子が凄いと絶賛するので、連れだって行ったら歌は無しで終わってしまう文句たらたら帰ったら、翌朝Mが新聞を見せて説明してくれた。彼女の歌い方は敵性国家（アメリカ）的な歌い方なので官憲に逮捕され、今後歌に歌うなど命令されたと。国は非常時、非常時と国民を煽り、生活必需品を筆頭に娯楽まで剥奪していった。そんな時代だった。

私は、中野正剛（1886—1943）《思想家？東条内閣の転覆を企て、逮捕され憲兵に拷問死されるならと割腹自殺、新聞には報道されなかった。著書に「獄中獄外」》に心酔していて、彼の追っかけをしていた。電柱や板塀にB4紙の「中野正剛大演説会」の知らせが貼られ、聞きに行った。会場は目黒区、港区、品川区の公会堂が私に、徒歩や自転車で行く行動範囲で、私達はよくMをまとめ役に、十代で、戦争と天下国家を論じ合っていた。

弁士（当時はこのような呼び方であった）は壇上の中央、左右どちらかの隅にサーベルを付けた巡査が一人腰掛け、弁士の話す内容をチェックし、駄目なら「注意」と警告を発し、言論の自由は完全に剥奪されていた。弁士は話す内容を変えねばならず「警告」三回で講演が出来なくなる法規制であった。弁士の力量は警察官の「警告」多寡で聴衆間に人気があった。戦争批判や戦争反対など『匂わせただけ』で投獄、拷問死される時代で、出征兵士や戦死者の遺骨送迎に出ないだけで非国民、天皇陛下への不忠義者の烙印を押され、地域生活（物資統制で隣組を通して配給制度から外される）から排除される仕打ちを受けた。

明治から戦争している日本は、戦争で死ぬことが天皇陛下への最高の義勇奉公で一家の誉れであり、戦死した家族が人前で泣くものなら、天皇陛下への不忠義者のレッテルを貼られ、人前で泣くことも許されない天皇中心の軍国主義の国であった。中野正剛は私達若者に「死ぬなど」言えぬので「天皇陛下の御為に名譽の手柄を立てるのが最高の親孝行だ、手柄話を両親に話すために絶対生きて帰ってこい」この『生きて』を力強く話すのであった。

この日は既に「警告」を二回受け、三回目の「注意」で話を締め括るなど期待して聞いていると、きたきた「赤子（せきし）である諸君は、快眠・快食・快便し、天皇陛下から戴いた質実剛健の身体で、天皇陛下にご奉公すべきである。天皇陛下も皇后陛下も快眠・快食・快便で諸君と同じである」《天皇は現人神（あらひとがみ）でも、諸君と同じ、飯も食べるし糞もする。これはもう重大な不敬罪》警官「注意」でなく「逮捕」と叫び立ち上がった時は、中野正剛壇上から飛び降り、正面の扉へ一目散、聴衆は左右に分かれ逃走通路を開け協力し後は追う警官を妨害。

この時の模様を部屋で話したら、一人が「天皇陛下のウンチはどうするのだろう」から始まり「おそれおおいから人の目に触れないように地中に埋める」「水洗で流し品川沖で魚の餌になり、江戸前寿司のネタになって帰ってくる」「いや、天皇陛下はおそれおおい御方で、その方の分身であるウンチを魚に食わすなど、もっての外、おそれおおいから薬品で焼き灰にする」「ウンチを焼くとどんな臭いがするのだろう」「論より証拠焼いてみよう」。

かくして『岡田のあんちゃん達は』隣組は勿論、風に乗り臭いの届く広範囲へ、大崎警察署も巻き込む《ウンチ焼却事件》を引き起こしたのである。

前述したように、裏木戸は大崎警察署の裏門への道であり、両側の家もこの通りに裏木戸があり、どの家もトイレは水洗でなく汲み取り式で、裏木戸側にあった。この裏道に七輪コンロを持ち出し、炭火をガンガンおこし鉄板が赤く

なるまで焼いた。円陣の中央のコンロを囲みウンチ焼きの儀式の準備が整ったのである。

誰かが「そろそろ乗せてみるか」汲み取りに行った奴が柄杓山盛りにして持ってきた。乗せた途端爆発だ。爆発と共に真っ白い湯気、熱で跳返り飛び散る熱いウンチ、強烈な臭気、これらが一気に頭の先から足の先まで全身に降りかかり、アツと言う間に大きな塊となって周囲に広がる。アチチと飛び上がり一瞬脳裏に全員が「床屋」とひらめいたらしい。全員叫びながら床屋へ一目散に飛び込み、無言で我先に洗面台を占領した。ホッとする間もなく、床屋の親父やお客が臭い臭いと騒ぎだし、とんでもない奴だと放り出される。悪臭は警察署にも届いたらしい。近所のおばさんは「岡田のあんちゃん出ておいで」警官は「岡田の小僧出てこい」と探している。

附近は悪臭プンプン、炭火はまだ燃えウンチ大方焼けて炭化、それを囲み鼻を押さえながら、おばさん達、隣のクリーニング屋、床屋一家にお客や野次馬も混じる中で私達は必死に弁明。気の早いおばさん達は「失礼な天皇陛下様がお可哀想に」と、おばさん達だけで罪状を決めている。野次馬達は「神聖」な天皇陛下を侵したから逮捕は間違いないとか、「徒党」を組んで天皇様を馬鹿にした行為は重罪だと、勝手に罪状を決め、私達の罪をだんだん重くしていく中でお巡りさんの事情聴取が始まる。

警察署の裏からお巡りさんも数人来ている、経過説明の途中、昼寝によく来る私服のお巡りさん、クスッと笑い、全部を聞かず「これから、おそれおあいから天皇陛下のお名前を出さないように」の「厳重注意」で勘弁され、おばさん達や野次馬の期待を見事に裏切った。抑圧され娛樂も剥奪された世相で、おばさん達は時代が時代だけに大きな声で話せず、ひそひそ話して「天皇陛下とウンチ焼却事件」として地域に広がり、銭湯や食堂では知らない人達まで、親指と人差し指で鼻を摘む仕草をして「あんちゃん達やっただって」と親しく話しかけ、一服の清涼剤に利用されていた。

日本は私の生まれる前から、いつ終るか判らぬ戦争で男を使い果し、徴兵年齢を一年繰り下げ、私も十九歳で1944（昭和十九年）七月歩兵に甲種合格。おばさん達は人気者が一人居なくなると惜み、お巡りは問題児が減るとホッとした貌で、入場券で五反田駅ホームまで出向き万歳万歳と歓呼の嵐で見送ってもらい、恐怖の軍隊に入営する。

初年兵は屋外は歩くことも許されず駆け足。大元帥陛下、天皇は上官の命令は朕の命令と思うべしと命じ、下級兵士に絶対服従を強制したから、一日遅く入隊しただけで先輩から理由もなく殴る蹴るの私的鉄拳制裁。夜中に叩き起こされて殴られることもある。理由は明治に軍隊が出来てから、男ばかりの異質な鬱憤を、弱い者苛めで解消さす単純なお楽しみゲームで、内容は下劣なサデスト化し、連綿と「引き継がれている伝統行事」なのだ。それに拍車をかけたのが天皇陛下は将校に「兵には考える余裕時間を与えるな」と命じているので、将校はこれ幸いと、見て見ぬ振りで軍隊は益々陰湿な集団社会になっていた。国は国民を忠君愛国のマインドコントロールをし、狂人的な軍国主義国家を維持していたのだった。

万歳万歳と勇ましい歌まで歌って貰って派手やかに入隊したが、日本を離れる時は国民にも内緒で気付かれないようにコッソリと深夜広島駅に向かった。駅に続く両側の家は真夜中なのに起きて外に出て、門出の日の丸の旗を掲げ、街路樹や電柱の陰に隠れ無言で合掌、この拜んでくれる姿を見た途端、ヨシッこの広島の人達のためになら喜んで死ぬると、自分自身に言い聞かせる。

北満第六国境守備隊は歩兵十中队・砲兵四中队・工兵一中队で、黒龍江の対岸ソ連領では重砲やマンモス戦車が、砂塵を巻き上げての猛訓練が遠望出来る。ドイツの敗北1945（昭和二十年）五月以降益々増強しているのが演習訓練頻度で判るようになる。私は歩兵二中队、砲兵一中队で守備する朝水陣地、ここは小興安嶺山脈の山腹を掘り貫いて厚さ一メートル五十センチのコンクリートで固めた巨大な永久要塞。労働者募集でなく、北支派遣軍が華北で強制拉致した中国人。完成と共に軍の機密保持で全員殺害したと教えられる。日本は非人間的な残虐行為を平然としていたのだ。我々の任務はソ連軍を三時間だけ食止め、この三時間で他の関東軍を戦闘準備さす目的であった。

八月六日大隊本部へ命令受領に行き、中隊長に渡す前に読んでしまう「広島に新型爆弾、兵を屋外に出すときは白の長袖を着せよ」私は、新型爆弾は白の長袖で防げる、皮膚に付着すると肉が腐る毒ガスと思い込む。命令は兵に伝達されぬ間に九日ソ連軍攻撃。我々が訓練演習した土地を訓練演習通りに攻めてきた。ソ連兵は日本兵を殺すのに味方諸共火炎放射器で焼き殺す戦術。演習通り人間爆弾で戦車を破壊擱座さす。通信機破壊で孤立。日本軍将校が降伏勧告に来たがスパイと見破り殺したとか、開拓団少年が戦車を擱座させたとかの噂の中、ソ連軍と対等に戦い、二十一日ソ連軍将校白旗を掲げ陣地に来る、勝ったぞ！ソ連が降伏したぞと、万歳万歳と踊り狂う。ミカド（天皇）は十五日ラジオで負けを全世界に向け放送したと教えられる。

「兵は戦闘中負傷するも自ら応急の処置を施し、八方手段を尽くし戦闘を続行すべし、たとえ戦闘に耐えざるに至るも後退すべからず。戦闘激烈にして死傷続出し、或いは紛戦を惹起し命令徹底せざるか、指揮官を失いたるも自己の銃剣を信頼し戦闘を続行すべし」この大元帥陛下、天皇の命令を守り死闘を繰り返し、三時間どころか九日から二十一日迄守り抜いたのに、兵より先に降参していたと聞いて、詐欺師のペテンだと怒り心頭。裏切られたと情けなくなる。

シベリアではスターリン大元帥に乗換たアクチブが現れた。私は大元帥は天皇一人で懲り懲りだお断りと言ったら、人民裁判で吊し上げられた。ロシア人労働者が広島、長崎アトム全滅と教えてくれたが、アトムが理解出来なかった。白の長袖で助かると思っていたのは、地獄のシベリアから二年後に生還してくれた広島の人達が全滅したと知ったのは、地獄のシベリアから二年後に生還してからであつた。拜んで下さった人達が死に、拜んでもらった私が生き残った事実に向き合って生きている。戦争では殺しにきた人を先に殺し生き延び、シベリアでは体力の無い者と、補充兵（現役兵より年配者）が先を競うようにドミノ倒しのように死んでいった。復員した私に占領軍（マッカーサ大元帥）から四キロメートル以上の行動は申告許可制と命令された。四キロです。

このように私の青春は思想も生命も人権も三人の大元帥に振り回され、翻弄された、痛恨の青春であつた。もう戦争はこりごりです。御免です。

平和憲法は 戦死した父からのプレゼント

江間 万里子

私は三歳のとき父を亡くしました。それは、日本が長期に及ぶ戦争に負ける僅か一週間前の、八月七日でした。私の中に父の存在感や、記憶が欠落しています。その代わり「戦争」という言葉が焼きつきました。頭の上を通り過ぎるB29の爆音と、防空壕の中の闇だけが、記憶に残っている私です。

当時も、今の有事立法の内容と同じ状況であったと思います。父は銀行員でしたが身体が弱く兵隊検査に合格しなかったと聞いていました。が、戦争の役にたたねばならないと、軍需工場に働きに出かけたそうです。そこが豊川海軍工廠だったのです。アメリカ軍は日本中の町を爆撃しました。港や工場、鉄道は勿論、日本の工業力の底力は今も「町工場」にあるように、戦争中も「町工場」が町の中に点在していたので、町諸共「町工場」を空襲しました。これを日本側は無差別爆撃と言って非難しても通用しません。それが戦争なのです。

豊川海軍工廠は海軍の兵器武器を生産する工場です。その規模は東洋一を誇り、二百ヘクタールに七百棟の工場群が建ち並び、三割の女性を含む五万五千人が働き、海軍の使用する武器兵器の七割を生産していました。屈強な労働者や熟練した工員は兵隊に動員され、足りない工員は有望な大学生や、未来ある中高生が勉強をせずに全国から集められ、十三歳の少女もいました。八月七日B29爆撃機百二十四機が、二百五十キロ爆弾を二十六分間に三千二百五十六発投下し、二千六百人が爆死しました。この爆撃の凄さを伝えようと、毎年豊川市立代田小学校では、学徒動員の少女を主人公にした創作劇「ああ・豊川海軍工廠」を演じているほどです。今年の発表日は十一月十八日土曜日。代田（ダイダ）小学校は名鉄豊川線諏訪駅徒歩十二分です。

五万五千人といえば、岩倉市や常滑市より多い人数です。その規模の豊川海軍工廠がたった三十分ほどで地獄にさせられた爆撃の跡地で、おびただしい死体の中から一つを『父』と決め骨を拾いましたが、父の骨である証拠はなにもありません。そのとき妊娠中の母は、幼い娘二人を抱え途方にくれ、その後は苦勞の連続だったと聞かされて育ちました。父が戦死した年の暮れに弟が産まれましたが、産後の静養不足、夫なき苦勞や疲勞が重なり、栄養失調で倒れました。敗戦後は薬も食料も手に入らず、母と弟の体力の回復は遅れ、長女の私は山寺の叔母の家に預けられました。山の中のお寺は淋しく、特に夕方山鳩の鳴く声が寂しさを倍増し、腹痛を訴えたことなど忘れられません。

母は助産師（当時は産婆さん）でしたので、ある程度の収入もあり、再婚もせず三人の子どもを育て上げました。着物を子どもの服に仕立て直し、着せてくれましたが、その度に母の着物が減っていききました。戦争に負けて日本中が貧しくなりました。お産のお金が払えない人もいました。お金の代わりに米・豆・野菜などを貰ったりして育てることが出来たと聞いています。私達三人の子どもは母が苦勞して育ててくれた他に、もう一つ感謝しています。それは、母が再婚を断わり女手一つで私達三人を育てたことです。母が夫と呼ぶ人が私達の父であるからです。特に弟は父が空襲で死んでから生まれているので、父への思いはなおさらです。

敗戦の翌日から平和で豊かな生活ができたわけではありません。何年も苦しみが続くのです。大勢の人が食べるものがなく飢え死、空襲で家をなくした人は板で囲んだバラックに住み、衣類も暖房もないので凍死する人もいました。今で言うホームレスです。何より悲惨なのは戦争で親を失った戦争孤児でした。私の知人は調味料もなく、味付けに名古屋港の海水を瓶に入れ持ち帰り、塩の代わりにしたと言っていました。戦争中の食べもの「すいとん」も平和を味わう一つですが、一日「塩抜き食べもの」を体験して戦争と平和を考えてみて下さい。

戦争で生き残った人達は、苦しい中でもB29や艦載機の銃撃もない平和を喜び一生懸命働き、今の繁栄している日本の基礎をしっかりと造り上げたのです。戦争で夫を亡くした母は、女手一つで私達を育て、これからは「手に技術」と、私に「助産師」平和は身だしなみからと、妹は「洋裁」弟には「クリーニング」を習得させ自立させました。このように私の人生の原点が「戦争」であり、再び戦争にでもなれば、相手国の平和な家庭を「私の家のように」痛めつけるとんでもないことだと、認識して頂きたいと思います。

かえすがえすも残念なのは、もっと早く降参していたら沖縄地上戦も、広島も長崎も、日本中を爆撃されることも、北方領土も、満州の日本人棄民残留孤児も、朝鮮半島の分断国家も、そして神風特攻隊もなかったのです。日本国憲法はこのように多くの、犠牲者と戦争と云う愚かなことを反省した上に立っているのです。何百年も前のことではなく、たった六十年前のことなのです。憲法九条の理念とその心を次の世代に繋げていくことが、戦争で生き残った人と、いま生きている戦争犠牲者の子孫の勤めと確信しています。

平和憲法は戦死した父からの「プレゼント」だと私はありがたく受け取っています。平和のプレゼントを世界へ発信する平和国民になってください。

祖父父母たちの太平洋戦争

諸輪中学二年生

伊藤ゆきの

【祖父 八十四歳の話】

1941 (昭和十六年) 太平洋戦争始まる。

1942 (昭和十七年) 二十歳 徴兵検査。

1943 (昭和十八年) 二月 軍隊に入隊

1944 (昭和十九年) 同年兵三人と出兵 列車で清崎↓豊橋↓名古屋へ

村中から「お国のために」や「バンザイ」という声をもらったそうです。村から、若い人がどんどんいなくなってしまう、「俺がいなくなってしまうらどうなるんだ」と思っていたそうです。おじいちゃんは九人兄弟の次男で、上のお兄さんは海軍へ行っていたので、悲しすぎて、おじいちゃんのお父さん、お母さんは見送りにこられなかったそうです。この時おじいちゃんは、『もう二度と親に会えないんだなあ』と思ったそうです。駅まで送ってくれたのはおじいちゃんの、おばあちゃんだけで列車が発発してから、列車を必死に追いかけるおばあちゃんの姿が、今も鮮明に思い出させると。おじいちゃんは言うていました。

★訓練中に鎖骨を怪我し入院する

入院しているとき、おじいちゃんは、皆に送ってもらったときながら、自分は戦争にもいかずこんなところでウジウジしている。情けなくて恥ずかしくて誰にも相談できずに独りで泣いたそうです。その時、おじいちゃんの知人が、家族に入院していることを知らせてくれたそうで、お母さん、妹、お父さんがお見舞いにきてくれたそうです。その時、お父さんが「生きていてよかったなあ」と言ったそうです。

この時入院していなかったら、おじいちゃんは泉部隊536334独立歩兵第一連隊というところに入って、いつロシアが攻めてきてもいいように、モンゴルで猛訓練をするはずだったそうです。この泉部隊はその後、丸一年訓練をした後、南方に移動、アメリカ兵と対戦。飢えや、マラリアなどに苦しめられ、力尽き、全滅したそうです。おじいちゃんは、これが私の運命の境目だったと、言っていました。

★リハビリのために岐阜県の下呂へ

みんなは戦っているのに……自分は非国民じゃないか、情けない……と、その当時の若い人として、とても不甲斐なかったそうです。

★怪我が治り千葉県の陸軍歩兵学校へ教官として赴任

おじいちゃんは、怪我をして、戦争へ行かなかった分、ここで一生懸命やっただそうです。この頃、今の習志野や成田は軍隊の演習場だったそうです。おじいちゃんは、「決部隊」という、一番若い人がいる部隊にいたらしいです。決部隊は、アメリカが東京に攻めてくるのを阻止する部隊だったそうです。そこでは、爆弾を持って、塹壕や、戦車の下などに入る練習をしていたそうで、練習のどれも命がけだったそうです。おじいちゃんは無心になってやることをやっていたそうです。

おじいちゃんは、中学二、三年ごろの時、結核のような病気にかかってしまい、学校に行けず、勉強ができなかったので、上の人の目にとまるよう、とても努力し、真面目に生きたそうです。おじいちゃんは、努力の結果、地道に昇進しました。

そこには、韓国からきた人などいたそうですが、そういう人たちは差別されたりして、ノイローゼになってしまいう人もいたそうです。おじいちゃんは、大げさに助けることはできなくても、そういう人のためにやれることはしようと思ったそうです。おじいちゃんは、ここで生き方を教わった、と言っていました。

★戦争がはげしくなる

多分、この頃くらいだと思いますが、軍隊でも一日に三回食事がたべられなくなっていたそうです。空襲の時はどこを見ても赤一色で、家族にもう一度会いたい、思ったそうです。

★1945（昭和二十年）八月十五日終戦

【おじいちゃんの感想、その他】

自慢できるようなことはなかったけど、今まで生きていて、いっぱいいろんなことを勉強することができた。生きている、ということが、とてもありがたい。今も、生きている間にためになることをしたい、何をやるにも、一生懸命に。

戦争のとらえ方が、日本は野蛮で、おさなかつたと思う。宗教的には、すばらしいことをしていても、歴史上ではとてもいけないことがたくさんある（自爆テロとか）。自分がいつ死んでしまうか分からない生活、とても恐ろしい。捕虜になるくらいだったら、腹を切って死ねと、敵を殺すための手榴弾以外にも、自分が死ぬために使う手榴弾もあった。本当にあの時怪我したのは運がよかったと思う。

今は、パソコンとかで、簡単にいろんなことが調べられる時代。だから、生きていくうちに色んなことを知ってほしい。だから、こうやって長い時間話を

聞いてもらえてとても嬉しい。ありがとう。

【感想】

このレポートを作ったことで、何かを知ろうという意欲が沸いた。おじいちゃんの話は今の私にとっては考えられないことばかり。好きなものだけ食べて、学校休みたきゃ休んで、だいたいのが自由。そんな、ふやけた生活をしている私にとっては、おじいちゃんの話は、とてもショックだった。もちろん戦争で、何人もの人が死んでいったこともショックだったが、私がもっとショックを受けたのは、おじいちゃんの心、なにごとにも頑張り、人のことを心配し……。私にいったいこんなことができるだろうか？きっと、人に甘えてばかりの私にはこんな強い心を持つことはできないだろう。夢と理想に満ちた今の世の中を、私はもっと、大切に生きるべきだと思った。

私はまだ、何も知らなさ過ぎる。生きているうちにもっといろんなことを学びたいと思った。そして、いろんな人の話を聞きたい。自分が体験できないことを知るには、人の話を聞くしかないから。

戦争、遮断された社会、理想も夢もない。日本はこんな状況をつくるしか、道がなかったのか？答えはNOだと思う。もう、こんな過ちは犯したくない、私は日本人としてそう思った。

祖父母たちの太平洋戦争

諸輪中学二年生

近藤かおる

【はじめに】

近所に住むAさんは、私の家の祖父や祖母と親しい。出身は長崎県の平戸で、兵隊に行ったり、被爆したりした経験を持つ人だ。冬休み、私はAさんに戦争に付いての話を聞いた。その話と自分の感想、そして実際に自分の目で見た「長崎」を自分なりにまとめてみた。

【Aさんの話】

①Aさんの略歴

Aさんは、大正七年生まれの八十八歳。長崎県平戸生まれ。二十三歳のとき召集令状がきて出兵。陸軍の歩兵として、二年五ヵ月、中国の山西省に滞在。昭和十六年十一月三日帰国。その後、終戦まで長崎の「道の尾」（西彼杵半島）に住み、軍需工場で働いていた。昭和二十年九月、故郷の平戸にもどる。昭和三十八年、愛知県東郷町に転居。

②出兵

赤紙という「召集令状」がきて、兵隊に行くことになった。母の在所に挨拶に行ったら、おばあさんが「兵隊に行くなら、お別れだね」と言っていて泣いた。帰りは、いつまでも、見送ってくれた。

博多から、中国に行く船の中で、仲間の一人が突然おかしくなった。日本にいたときはすごく元気だったのに、船の中で自分が誰かわからないほどおかしくなった。船の中では、これから何処に行くかも知らされない。不安だったのだと思う。その人は、銃を取り上げられ、人を付けて帰された。

※兵隊というのは、強制的に行かされるということは知っていたが、何のために戦うのかとか、何処へ行くのかとか全然知らされていなかったというのは、なんだか兵隊さんがかわいそうだなあと思った（かおる）

③中国へ

陸軍の兵隊として、中国にわたった。中国の山西省というところに滞在した。馬に乗り、鉄砲を持っていた。中国人の家を占領し、そこで寝泊まりをした。よその国に上陸して、勝手に家をとってしまうのだから、いまだに中国人が日本のことをよく思わないのも無理はない。近くにいた六歳ぐらいの中国人の女の子と仲良くなった。キャラメルをあげていたら、なついて、家を離れるときは、敵なのに手をふって見送ってくれた。言葉が通じなくても、気持ちに通じ合うと思った。

なぜ、中国と戦争をするのか、自分にはわからなかった。当時の中国は、水が悪い。一度、赤痢にかかって下痢がとまらなくなって困った。正露丸を飲んでも治らない。現地の中国人に聞くと、干したニンニクを生でかじれと言う。このおかげで、一晩で治った。このように、中国の人には、助けてもらった。同様に下痢で苦しんでいる人に、ニンニクを食べるように勧めたが、どうしても嫌だと言う。そこで、「黒い袋に入って、故郷に帰りたいか」と説得して、ニンニクを食べさせ、見事に治り後に感謝された。当時、戦死した兵隊さんの骨は、白い木の箱に入れられて家に帰されたが、病死の場合は黒い袋に入れられて帰された。戦死と違い死後も国から補償はなく、まさに犬死にだった。骨のない兵隊さんは、箱の中に現地の砂が入れられてきた。

※敵である中国人が、日本人の兵隊を助けてくれたと言う話は、びっくりした。また、兵隊さんはテントみたいな処で寝泊まりすると思っていたが、中国人の家を取り上げて使っていたというのも、ひどいなあと思う。

戦争に行ったら病気になるって死ぬのも、戦って死ぬのも、どちらも戦争が原因なのに、病気で死んだ人は黒い袋に入れられて帰されると言うのも悲しい話だ。戦争で戦う兵隊さんは、ただ命令に従っているだけ。原爆を落と

した飛行機の操縦士だって、そうだろう。
罪のない人を殺人者にして、罪のない人の命を奪う。国の責任は大きいと思っ
った。(かおる)

④ 帰 国

昭和十六年十一月三日、帰国。平戸に帰った。ほっとした。
こんどは白紙という「徴用令状」がきた。徴用令状は働く工場が決められて
いて、時計屋とか酒屋さんなど商店の主人を工場に動員する仕組みで、自分は
、長崎造船所だった。戦争中田舎の人は働くのに苦労した。健康であれば、み
んな働かなくてはいけなかった。男は戦争に行っているの、女たちが農業を
した。米やイモは「これだけ作らなければいけない」という、量の割り当てが
決められていた。自分たちが食べられなくても、決められた量を出さねばいけ
ない。重さをごまかすため、イモの中に石を入れる人もいた。

非農家は食料に苦労した。衣料品を持って、農家へ行き、食べ物と交換して
いた。平戸は田舎だったが、佐世保の海軍基地が近いので、よくB29が空襲
にきた。夜はどの家も電灯に黒い布をかぶせて明かりがもれないように気を付
けたが。少しでも明かりが漏れると攻撃してきた。

⑤ 原 爆

原爆投下日の八月九日は、長崎造船所を離れ、佐賀へ出張に行っていた。当
時、原爆という言葉は知らなかったが。違う種類の爆弾が落とされたらしいこ
とは聞いた。「今の長崎、ちょっと想像がつきませんよ。」と言われた。

十一日、長崎市に行く。原爆投下から二日経っていても、異臭がただよい、
地獄の光景だった。電車がまだ燃えていた。中には、たくさん死体があった。
。電柱も燃えていた。電線がぶら下がったままになっていた。川にたくさん
の人が突っ込んで死んでいた。知り合いで「片腕がやけどしただけで、助かっ
た」と喜んでいた人がいたが、まもなく死んだ。途中、出会ったおばあさんが「
身寄りを探している。でも見つからないから、私を殺してくれ。」と言ったが
、「そんなこと言わずに、もっと探したら」と励ました。

八月いっぱい長崎にいたが、体にいいことはないと思い、平戸に帰った。自
分は、原爆投下のときは長崎にいないので助かったが、その後、長崎にいたの
で「被爆」することを後から知った。原爆が恐ろしいのは、何年か後で後遺症
が出るからだ、自分も、原因不明の「めまい」や「医者も首を傾げるような症
状」が出る。今でも、不安は続いている。

昭和六十一年、体調が悪く入院した先で、「被爆者手帳」を貰うことを勧められた。その頃、ちょうど長崎の戦友から、入院したという知らせを受けたので、長崎に見舞いに行った。そこに、被爆当時二歳だった戦友の息子がおり、三菱や県庁に行つて、被爆をしたという証明になるものを探してくれた。被爆手帳は、医療費が無料になるので、ありがたかった。

※もし、当時の日本人に原爆についての知識があつて、どうしたらいいかという情報が与えられていたら、Aさんは長崎に行かず、被爆することもなかったのにと、思う。でも、もし今、原爆が落とされて、被爆するからと誰も助けに行かなかつたら、町の人は見殺しにされてしまうわけだ。つまり、そんなにも人に害をあたえ、その後も悪い影響を与え続ける原爆なんというものを、使うこと自体がまちがっているんだ。（かおる）

⑥終戦

八月十五日、終戦を知り戦友の家を訪ねると、人のいた気配はあるのに誰もいない。聞くと、アメリカ人が攻めてくるから、家族で山へ逃げたという。長崎でも平戸でも、女の人はアメリカ人に襲われるからということと、乳母車に大切なものをつめて、それを押して山へ避難する行列ができた。

【おわりに】

話が終わったとき、「なんで戦争をしなきゃいけないのかね」とAさんは、おっしゃった。一緒に話を聞いてくださったAさんの奥さんも、当時を思い出して涙ぐんでみえた。みんなを不幸にした戦争。本当にどうして戦争をしたのだろう。このレポートを作成しながら、二度と、この悲劇を繰り返してはいけないという強い気持ちがわいてきた。

【長崎を訪ねて（かおる）】

平成十七年十二月二十七日から二十九日まで、長崎へ旅行した。自分の目でAさんの話に出てきた長崎を見ようと思った。

二十七日。長崎市。長崎原爆資料館、原爆落下中心碑、原爆の被害にあつて、今は再建されている浦上天主堂、平和記念像のある平和公園へ行く。原爆資料館では、全国の小・中学生の折った「折り鶴」の多さに驚いた。

アメリカ人の家族が、熱心に見学していたり、テレビ局の人が撮影にきていたりした。どの人も、ものも言わず、真剣な表情で展示物を見ていた。どれも、言葉にうまく出来ないような悲惨さが伝わって来るものばかりで、何とも言えない気持ちになった。一番心に残ったものは、人の影が残った写真だった。原爆の威力というのは、すさまじいと思った。

浦上天主堂には、今でも原爆で首が吹き飛ばされた石像が残されていた。また、直径五・五メートル、重さ五十トンもあって、爆風により三十五メートルも離れた「北の川」に吹き飛ばされた鐘楼ドームが、今でも、そのままの姿で残されていた。

平和公園にある、平和記念像は、長崎のシンボルとして有名だ。作者の北村西望は、「天を指す右手は原爆を示し、左は平和を、顔は戦争犠牲者の冥福を祈る」というメッセージを残している。とても、たくましい姿に、地獄の底から立ち上がって、町を立て直した長崎の人達の強さを感じた。

平和公園の近くに、浦上川が流れていた。Aさんが言ってみえた、たくさんの死体があった川だ。何も知らなければ、ただの川だ。ただの町。しかし私には見えなかっただろう。でも今は、このただの川を見ても、苦しい気持ちになった。

二十八日、佐世保。ここは、いまだにアメリカ海軍や海上自衛隊の基地があり、港にみない船がたくさんいた。戦争が終わって六十年たったのに、まだ戦争のための基地があるなんて、本当は、きれいな港町のはずなのに。昨日見た、原爆資料館の被害の写真を思い出し、とても嫌な気持ちになった。

二十九日 平戸。Aさんの生まれ育った故郷だ。こんなのどかな町まで空襲が来たなんて・・・。

編集付記

広島原爆日 1945（昭和二十年）八月六日 午前八時十五分

推定犠牲者 十三万人〜十五万人

毎年原爆日に犠牲者を合祀し

現在 二十四万二千四百三十七柱

長崎原爆日 1945（昭和二十年）八月九日 午前十一時二分

推定犠牲者 七万人〜九万人

毎年原爆日に犠牲者を合祀し

現在 十三万七千三百三十九柱

戦後六十年まだ犠牲者が続く怖ろしさ、戦後はまだ終わらない

祖父母たちの太平洋戦争

諸輪中学二年生

浅井 純

【はじめに】

急なことに、提出期限までに風邪をひいてしまいました。コンピューターは使えなかったので、携帯電話を使って書きました。また、当時の資料などはなく、見づらい文のみのレポートになってしまいました。がご了承下さい。

【父方の祖母について】

祖母は1923（大正十二年）生まれで現在八十二歳。出身は尾張旭市です。お見合い結婚で長久手町へやってきました。その結婚相手の祖父は、残念ながら八年前に八十一歳で他界しています。

戦時中、祖母は空襲警報が鳴ると、子どもと共に防空壕へ避難したそうです。そのようにして、いつも防空壕の中にいたものだから、空襲はどんなものだったか見たことがないとの事でした。しかし、実家の空襲は様子を聞いたことがあるということ、その話をきかせてもらいました。

祖母の実家は裕福で、家は二階建て、屋根は瓦葺きの立派な造りでした。空襲の時、周りの家は燃えやすい造りの家だったために、燃えてしまったのですが、瓦屋根だったために火のついた瓦を落とし、全焼を免れたそうです。

【祖父について】

冒頭で述べた通り、祖父は八十一歳で他界しています。なので、また祖母の話を頼りにまとめました。

祖父は、兵隊でした。満州へ行きました。その頃は、赤紙が一枚来ただけで、戦争へ行かなければいけない時代です。例外なく、祖父のもとにもそれは来ました。そして徴兵検査を甲種合格でパスし、長久手町から十五名の仲間と共に満州へ行きました。（甲種の甲は、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸とあるうち、最も健康な者を甲と言います。丁は徴兵に不適格、戊は療養中につき翌年再検査という意味。由来は中国の十干より）

満州で見回りをしている時に何者かに手を撃たれ、小指以外の指先は吹っ飛んでしまいました。だから、小銃の引き金は引けなくなり、戦うことが出来なくなります。そこで、祖父は満州の病院へ。仲間は次の戦地へ向かいました。しかし、その人達は全員戦死してしまいました。今思えば、祖父は運が良かったのかもしれない。

そして祖父は退院して軍需工場の仕事につきました。想像がつくと思います

が、軍需工場なんて真っ先に爆撃されるようなところです。祖父は仕事に行くのを親に止められ、それから終戦まで、仕事に行くことはなかったそうです。名古屋に近かったこともあってか、きっと爆撃もすごかっただろうと思います。

祖父がもしまだ元気でいれば……と思うと悲しいです。しかし、その時代を生き抜いて父や叔父、叔母を育てた祖母は凄いと 생각합니다。

【全体を通しての感想】

戦争は恐ろしい。近代の工業力で、三菱が作り出した兵器。これは今でも見ることが出来る。《皆》という輪から外れ、一線を越えてしまうと白い目で見られる。このごろで言えば《非国民》などの言葉。一つ一つが恐ろしい。敵に捕まるなどという言葉を忠実に守り、捕まった時には手榴弾で敵も自分も爆死した日本兵。飛行機に爆弾を積んで突っ込む神風特攻隊。この様子を見たアメリカ兵はとても驚いていた。「なぜそこまでするのー」。

感想文には、社会の授業で見たビデオの中から印象に残ったものを書き出した。戦争反対。たくさんの人々が叫んできたが、なぜなくならないのだろうか。世界が平和になることを願ってやまない。

今回のレポートを通した学習は短期的なもので、真に迫ることはできなかったと思う。事実、本などの資料は（教科書・資料集・授業内容を除けば）無に等しい。それでも今回のレポートをまとめるに当たって、貴重な祖母の話聞いたのは参考になった。二年生になり、日本史が好きになったので、これを機に他のことにも視野を広げて、興味を持った近代の日本について学んでいきたい。

祖父母たちの太平洋戦争

諸輪中学二年生

加賀 元貴

僕は祖母に疎開したときの話を聞きました。祖母は当時北海道に住んでいました。だから疎開したのは終戦後だったそうです。疎開した理由は、住んでいた函館にアメリカの駐屯隊がたくさん来て、そこにあった旅館を全部奪って、近所に住んでいた若い女性と遊んでいた。（その若い女性は誘拐されてきたらしい）それで危ないと思ったから逃げたそうです。終戦の年、昭和二十年十月ぐらいのことです。そこでの思い出は今も残っているそうです。

疎開先は「馬場村」というところで勉強はその分校でしたそうです。分校

の校長先生は祖母の知り合いで、地元では村長よりもすごいと言われていたそうです。分校までの道の途中に自殺者がよく出る場所があって、すごく怖かったそうです。疎開先は農業が盛んなところで、牛乳も搾りたてが飲めたというところでした。とても甘くて濃かったみたいです。そこでの食事は飯よりも牛乳と、取れ立ての野菜の酪農食（今でいうクリームシチュー）が中心で、たまに配給の米を少しだけ入れてリゾットみたいにして食べたこともありました。蕎麦やとうもろこしも作っていました。たまに、家の天窓から腹を空かしている熊が家の中をのぞいていたこともあって、びっくりしたそうです。農作物は自分たちの大便や小便を肥料にして育てました。その肥料を運ぶために今でも東南アジアなどで使われている桶のようなものを使っていて、一度失敗して肥料が垂れ流しになり、後の処理にとっても困ったそうです。

【感想】

まず、祖母が疎開した時期や理由に驚き、駐屯隊がしたことになり怒りを覚えました。だって何も関係ない女性を誘拐と同じようなことをし、その上、変なことをしていたから……。しかし、食事とかは今と同じようなものを食べていたし、近所同士も仲良しだったというので祖母は恵まれていたと思います。疎開先では「冬の運動会」というのをやっていたそうです。あと、蕎麦は新しい靴下をはいて踏むとおいしくできるといふことも教えてもらいました。いつかは僕も祖母の疎開先に行きたいなあ、と思いました。

祖父父母たちの太平洋戦争

諸輪中学二年生

伊藤 晴香

【祖父の話】

祖父は戦争が終わったときは三歳でした。だから、戦争についての記憶はありませんが、中尉として中国大陸に行ったことがある、本屋のおじさんに話を聞いたことがあるそうです。その話の内容を書きます。

日本兵は相手を攻撃して全滅させた。敵軍だけでなく、相手国民にもひどいことをした。母親の見ていた前で、子どもを日本刀で切ったり、夫の見ていた前で奥さんの爪をペンチで引っ抜いてしまったり、また、奥さんを犯したりしたそうです。

戦争は兵隊同士戦って勝ち負けを決めるものですが、中国での戦争では一般市民にも大きな被害を与えました。だから、今、中国に住むおじいさん、おば

あさん達が、日本兵からひどい目にあったことを、子どもや孫に話し、日本人はこんなことをしたんだ、中国人が食べるものが無くても無理矢理奪ったり、財産を奪ったりした。だから、中国の人が日本をうらむのは当然だと思う。だから、小泉首相が靖国神社を参拝することは、東条英機とか、中国で戦争して出世した、中国人にとって悪いことをした、そういう人をお祀りしている神社を参拝することは、これはいかん。

日本は無条件降伏をした。これは何を言われても、何をされても一切文句を言いません、ということだ。しかし、アメリカは紳士的で日本人が中国でしたような、ひどいことはアメリカ人はけっしてしなかった。日本人は占領軍が来ると、日本が他国にしてきたことを、されると思っただけでアメリカ人から逃げ隠れしていた。アメリカ人に見つかったら「爪」や「舌」を抜かれるてしまう、と思っていたが、そのようなことは一切なかった。進駐軍はトラックでやってきて、そのトラックを追いかけるとビスケットやチョコレートや缶詰をまいてくれた。昔のチョコレートは今のロッテや明治みたいな甘さでなく、ちょっと苦みのある甘さだった。進駐軍のトラックを毎日のように追いかけていたので、爪などは真っ黒だった。

【感想】

今回話を聞いて、日本がどれほどひどいことを他国にしてきたか、よく分かりました。日本は一生消えることのない傷を中国の人にとりつけたと思います。それとくらべアメリカはすごく紳士的だと私も思いました。私はなぜ日本軍が中国人に対して、そのようなことをしたのか理由が分かりません。いくら戦争に勝ちたいからといって、一般国民にまで手を出す必要はない。私はそう考えます。

祖父母たちの太平洋戦争

諸輪中学二年生

近藤 一輝

僕は太平洋戦争下の国民生活について調べました。

【切符制の採用】

昭和十五年四月に米・味噌・しょうゆ・塩・マッチ・木炭・砂糖などの切符制採用が決まり、翌十六年四月からは、酒の切符制も実施されるなど、主食以外の必要食料品も次第に切符制になっていったそうです。

【強制疎開と空襲】※家屋疎開Ⅱ一定区域の家々を取壊し空地にする。

空襲に備える家屋の強制疎開・学童疎開・警防団への動員・防空訓練への駆り立てなど、国民生活に対する圧迫は日ごとに高まっていった。昭和十九年秋からはついに空襲・艦砲射撃が始まり、一般国民特に都市の住民は、恐怖の中で逃げまどいながら、しかも命をつなぐ食料を買い求めてさまようなど、暗い生活の日々が続いたそうです。そして数多くの国民が空襲や艦砲射撃で尊い命を奪われ、住む家を失い、家族とも離ればなれになるなど、悲劇が繰り返されました。

また、日本において最大の兵力の供給源であった農漁村からは、全国にわたっておびただしい数の戦死者を出した。

【言論等の取り締まりの強化】

戦時下の国民生活に対する重圧として、言論、結社等に対する極端な弾圧が挙げられる。戦前から治安維持法・治安警察法・出版法などの言論、出版、集会、結社などに対する規制法規は存在していたが、昭和十六年一月に国民総動員法に基づく、新聞紙等掲載制限令、三月には国防保安法の制定と治安維持法の強化、さらに開戦直後の十二月には、言論出版集会結社臨時取締法が公布された。そのため蟻の這い出る隙間もないほどの取締法規がはりめぐらされた。

また、陸軍憲兵をふくむ治安当局の徹底した弾圧方針によって、日本国民は自由を完全に封殺された。例えば、真実のことを人に語っただけで、「流言飛語」として取締法により重罰を受けた。唯一の国民の政治に対する意思表示手段である総選挙も、昭和十二年以来昭和十七年まで行われず、しかも同年四月「翼賛選挙」が実施され、議会制度も完全に形骸化してしまった。

【感想】

今回、太平洋戦争のことを調べて、いろいろなことを知ることができた。

戦争は一人息子も長男も兵隊に

福井 清

第二次世界大戦の始まった一九四一年（昭和十六年）私は旧制中学の二年生（十四歳）四人兄弟の長男でした。十二月八日の早朝、暗い内からラジオは勇壮な軍艦マーチと大本営発表で日米開戦を告げ『我れ奇襲に成功せり！』と寝首を掻くような作戦の戦果に人々は興奮状態でしたが、私は大きな国を相手に無謀な戦争を仕掛けて大丈夫かと思いましたが、私の思いなど話せない時代でした。ただ、歴史の先生が「アメリカも国が出来て以来、外国との戦争に負け

た事を知らない国。日本は未だ戦争に負けたことがないと云っているが、昔、朝鮮半島へ二度も兵を出し、二度とも失敗している。戦に失敗したということは……解かるな。」ボソリと言った言葉は今でも頭の片隅に残っている。

三年生（十五歳）になると英語の授業が敵性語で減り、代りに軍事教練が増え記憶力の弱い連中は喜びましたが、父は「例え戦争に勝ったとしても、これだけ世界語になっている英語に、日本語が取って替わることは不可能なことだから、英語の勉強だけは怠けるな。」と言ったが、私は馬耳東風と聞き流していました。

野外教練といって農繁期に農家の応援に行ったり、学校の近くの空地を耕し「校外農園」にし、キャベツ・大根・甘藷・馬鈴薯等を栽培する授業が増えるばかりで、十四・五歳の子に木銃を鉄砲に見立てて人を突き殺す練習や、鋤鍬を担いで野菜作り肥料は人糞で、人を突き殺す練習と農業が聖戦遂行で、これが学業よりも生徒の本分になっていきました。

食べ物の種類が目に見えて減り始め、農村や漁村でない都会では南瓜だけとか、さつま芋だけとかになり、体調不良者が続出し私もこの年、体調を悪くし、急性肝炎（黄疸）のため長期欠席。期末試験には何とか出校し、試験成績は悲惨ながらも進級できました。

旧制中学は五年制でしたから、四年生は今の高校一年。従って五年生は高校二年生の年代に当たります。四年生（昭和十八年〃十六歳）になると学校も戦時体制の色が濃くなってきました。兵器工場へ動員労働員や、少年兵募集のため航空隊へ体験入隊が一週間前後の泊まり込みで行なわれたり、来たれ！少年航空兵・少年戦車兵などの志願兵募集が市町村役場を通して学校へ通達され、少年の心を燃え立たす方法に誘われるように、健康で成績優秀な生徒は海軍兵学校、陸軍予科士官学校、あるいは高等商船学校へ進む者が増えてきました。平時であれば、他の進路を選んだであろう人達が受験しました。

ひょっとすると、これら軍関係は学資無料と天皇陛下のためにと『親に孝行・天皇に忠義』と純真な少年の心を鼓舞した方法だったと思います。

四年生を終了すると、旧制高等学校、大学の予科の受験資格が出来。専門学校は五年を卒業しなければ受験できませんでしたが、この年から四年終了で受験できるようになりました。私はこの年も肺腺カタル（肺結核）を発病し長期欠席し、学力の方が伴わず前年と同じく、すれすれで進級できたのが精一杯

でした。文科系には徴兵猶予制度がなく、理科系は徴兵猶予制度が適用され、理工科系や医学系に進み、軍隊の委託生試験に合格し、卒業すれば技術将校とか軍医の道が約束され、合格すれば授業料無料で親孝行が出来ました。

このようにして四年生になると、学資を国が負担し、卒業後の進路も保証される軍関係を受験するよう行政も学校も奨励するようになり、五年生は受験から落ちこぼれた者と、受験出来ない体力の弱い者が大半を占めるようになり、学年の雰囲気も正常性が欠落するのと、学校自体が学校ではない環境に追い込まれていった。即ち、学生全員が家庭から、学生寮から軍需工場へ直接通い工員と一緒に兵器の増産に働いたのである。そして遂には空襲と艦砲射撃の頻度多発で昭和二十年には、卒業式も出来ない学校になっていったのである。

昭和十八年頃になると身体に多少のハンディがあっても男は徴兵され、次々と軍隊へ送り込まれ、母方の叔父は女ばかりの男一人で、視力が相当悪く徴兵検査で丙種合格。日清、日露の戦争に行った母方の祖父が「丙種だ兵隊に行かなくても」と内心ほっと喜んだことを思い出します。この叔父にも召集令状が来て、京都の連隊に入隊し、三カ月の訓練を受け沖縄へ派遣され玉碎。男系を絶たれてしまいました。そして急速に、日本各地の地域社会から、目に見えて男が次々召集されていくようになりました。

学徒動員の繰上げ卒業の余波が私達にも及んできて、四年生と同時期に卒業式が行なわれ、それぞれが自分の進路を決め旅立っていききましたが、病弱な体の私は長男でもあるし、兵隊への志願は考えてもいませんでしたが、志願兵の割当が学校へ来て、半ば強制的に受けさせられました。どうせ体力検査で不合格と思っていたのに、合格と言われ啞然としました。五月、名古屋大空襲で家が全焼し、防空壕で寝泊まりする生活の中、広島県の大竹海兵団に入団しました。明治生まれの大正デモクラシーで育った父が、黙って名古屋駅まで見送ってくれました。

海兵団の基礎訓練は三カ月のところ、学校で軍事訓練を受けていた理由で訓練は、一カ月半に短縮され、山の中にある教育実習部隊へ送られ、陸戦隊の訓練演習教育を受けました。昭和二十年八月六日早朝より、教育実習の成果を発表する演習試験は、夏休みで生徒のいない小学校校庭で行なわれ、整列して訓辞を聞いていました。八時十五分頃、距離約二十キロメートル離れている広島の方でピカッと光り、オヤッと思ったら、皮膚の出ている首筋がピカッと温かく感じたことは今でも忘れることは出来ない。体力のある者は広島復興に動員され被爆し今も苦しみ、私は焼け野が原の名古屋へ、十七歳と十カ月でした。

幾度も地獄から助けられる

山岡 三夫

日中戦争を生き抜き現役除隊し妻子ある三十歳の私に、昭和十九年（一九四四）八月十五日召集令状、名古屋歩兵三十三連隊に入隊し九月一日には満州（現中国東北）第六国境守備隊八中隊に、今度はソ連兵が相手だ人間爆弾で戦車攻撃の訓練。二十年八月九日ソ連軍攻撃、七曲陣地から二站陣地で応戦、二十二日降伏し九月下旬シベリアへ、翌年の昭和二十一年二月シラミが媒介する発疹チフスに罹る、ソ連は飢餓食で強制労働させ、痩せ衰えた病弱者はゴミを捨てるように黒河に徒歩で追放す、その数二千から二千五百人。

黒河は政府軍の管轄下であったが、二十一年三月八路軍に攻撃され我々のご主人様は八路軍になり、三月下旬第一梯団千二百名日本へ向け出発。四月上旬第二梯団千五百名出発し、第三次を待つ私達は黒河市街の南崗収容所に入る。収容所はシベリア追放組五百名と日本人婦女子約百名、隊長は長坂欣次中尉（岡崎市）でした。体調が回復した私は泊り込みで八路軍の副官所隊で、六月十七日屋根修理をしていたら、馬を飛ばして来た日本軍人が「お前達そんな高い所に居ると危険だ、今から戦争が始まる」と教えてくれ穴倉に隠れる。

最初は優勢な政府軍に攻撃されていたが、態勢を立て直した八路軍に政府軍は味方の戦死者を残し敗走。八路軍が戦死者を調べたら南崗収容所の日本人が多数居たから大騒ぎになる。収容所の食事は八路軍と同じ場所で、同じ物を食べ、侵略者『東洋の鬼』『リーベンクイズ』の差別もなく平等な扱いで、シベリアで痛めつけられた体力の回復に努めてくれ、回復した者は収容所外の道路工事隊、電柱立て隊、橋修理隊、消防隊、清掃隊、副官所隊、農家手伝いと、現地泊まりで派遣されていた。その作業現場へ政府軍が黒河を占領すれば、日本人を皆帰国さすの言葉で味方に勧誘したと判り、この恩を仇で返す日本人の裏切り行為に私達は動揺し、その心配が形で現れた。

四月に第二梯団が出発してから八路軍は私達を帰そうとしないし、このままでは又、中国の内乱に巻き込まれる恐れがあるので、長坂中尉が八路軍に早く帰せと交渉に行ったまま帰らない。どうも反乱の責任をとられ銃殺されたと伝わり、日本に帰れない不安が増幅し、六月二十一日午前0時監視の八路軍八名を叩き殺して、婦女子二百五十名を含む約五百五十名が脱走する。（これが橋詰達が調査掘り起している『黒河事件』脱走した半数以上は捕まり銃殺）

一方私も含め、黒河の市街や近郷各所に泊まりで出向き、働いていた日本人

は、理由も訳も判らぬまま全員公安隊に逮捕連行され監獄へ入れられる。私も連行されるので荷物を持つとしたら、お前は殺されるから荷物を置いて行けと言われ、監視兵を殺して逃げたから、日本人を全部殺すと言うのだ。私は中国戦線を生抜き、日ソ戦を生抜き、発疹チフスも助かり、九死に一生の運命もこれで終りかと心の中で妻と二人の子どもを思い出していた。

監獄では、消防隊、清掃隊から呼び出され銃殺。薄暗い大部屋へ片手に蠟燭を持った兵隊が入ってきて、蠟燭で顔を照らしお前とお前、その五人と、二十人ほど連れ出しては銃殺。監獄でなく地獄で、蠟燭を持った兵隊は閻魔大王の使いなのだ。監獄の中が銃殺で段々少なくなっていた四日目「副官所組は出よ」で、遂に私の番が来たと諦めました。外に出ると副官所の兵隊が馬車で来ていて、「間に合った山岡良かった」と涙を流して喜んでくれ、監獄で体力が弱っているからと馬車で迎えに来たというのです。そう、私は助かったのです。

地獄で仏に逢った喜びを本当に体験したのです。副官所に着くと驚いたことに所長以下全員で迎えてくれたのです。中国人の心の大きさと深さに感謝しています。兵隊の話を総合すると、黒河事件の関係日本人銃殺を聞いた毛沢東主席が、殺され殺しては際限がない、殺された日本の子が復讐でまた中国人を殺す。止める方法が一つある、それは今、中国人が我慢することだと銃殺中止の命令を出したと言うのだ。この命令を副官所の所長が早く知り、公安隊に交渉して私は一番早く出られたのです。後に残った人達も皆殺しは中止になり、三日後には全員出られました。

昭和二十一年八月になると、黒河の街に日本人解放のビラが貼られ、八月十五日大勢の中国人に見送られて第三梯団として日本への旅に、婦女子を含め約五百名ほどで最初の目的地は三百五軒先の北安へ、野宿しながらの徒歩で出発しました。病人や荷物を馬車に乗せ、強盗の襲撃に備え武装した八路軍が八名付きました。野宿しながら二日で九十五軒歩いて孫呉到着、足の弱い人は遅れてどんどん置いていかれ、前後に人影もなく一人旅です。

開拓団の婦人が「兵隊さん助けて」と、私達は五人で励まし合い歩きあひ歩きました。途中水も飲み干し、疲れ果てて腹は減るし喉は渴いて命の限界と、護衛の八路軍にも馬車の本隊にも見捨てられました。小高い所の農家に水を飲ませて下さいと倒れ込みました。すると生水を飲むと体に悪いから暫く待ちなさいと、五人を日当たりの良い処に座らせ、お腹が空いただろうと、食事を作って腹一杯食べさせて貰い、煙草はあるか？、お金はあるか？と日本ではとても考えられない言葉と実行に甘え一泊させて頂き、出発には弁当を紙に包んで

縄を掛け、一人で持つと重いから二人で担げと棒まで用意してもらいました。

黙々と歩き、何時の間にかこの五人に連帯感が芽生え、各自がこの人達から離れたら死ぬと思うようになる。集落の名を聞き、後九十軒で最初の目的地北安と判り、最後の力を振り絞りましたが、五人共限界、極限以上ここが墓場と観念して座り込みました。綿のように疲れへたばっていると、二人の八路軍が通りかかり「貴方達は何処から来た」と尋ね、「黒河」と言うと驚き、この先でトラックが故障し修理している直ったら乗せてあげると言い、兵隊さんに食事やお茶、煙草と至れり尽くせりのお世話になり、道が悪く揺れるから前の方に座りなさいと配慮して戴き、北安收容所に到着しました。北安から黒河までの鉄道線路をソ連は引き上げる時、日本の捕虜にはずさせてシベリアへ略奪したのです。北安からは鉄道が大連や釜山に乗り換え無しで行けるのです。

收容所に着いて驚いたのは、私達第三梯団よりも五カ月も前に出発し、日本に帰っているはずの第一、第二梯団の者が日本に帰れず残っているのです。第一、第二梯団北安で足止めと黒河で判っていたら『黒河事件』は発生しなかったと思ひ残念でなりません。尚、第一、第三梯団まで黒河、北安間を十五日、二十五日間で歩き、各梯団とも二百、三百人の行路死亡者が出ていた。

昭和二十一年九月十三日、明日は北安駅から千人以上の全員乗車と喜んでいると、この中から二人だけ入院して帰れない重病人の付添いに残れと通達が出る。皆この機会を逃がしたくないので名乗り出る者はいない。不運と云うか今朝、黒河から五人組だった春日井市の加藤さんが急病で入院帰国できない、変な一体感が湧き出てきて思わず「私が残ります」と。もう一人は名乗り出ず「籤で決め」島根県の人が残ることになる。翌十四日病院の窓から延々長蛇の列で北安駅へ向かう戦友達を涙で見送り、とうとう独りぼっちになったと落胆する。この日が私の三十二歳の誕生日だった。

更に次の日、十五日、入院の日本兵全員を貨車で南下移動の通達、早朝より病人を連れ駅の階段を三十回以上も上り下りし貨車に乗せ、午後三時出発。十六日ハルピン到着。ここで第六国境守備隊の病人百余名降ろし、私は重病者の付添いで引き続き重病人と南下し松花江の手前が終点なのだ。ここで更に驚かされる。松花江の流れが政府軍と八路軍の勢力分岐で内戦の真っ最中。河を渡れば政府軍だから、健康な日本人は南の政府軍兵力になるので渡さないのだ。鉄橋はあるのに使わず、政府軍と八路軍は話し合っ船で往来し更に不思議なのは政府軍の手足まといになる、日本の婦女子、老人、重病人は受け入れていることだ。当然、河と線路の土手は健康な日本人が難民となり溢れている。

私達は貨車から降りて、一時間待ちで乗船することが出来ましたが、気の毒なのは婦女子と老人でこの日は乗船出来ませんでした。十四日北安を出発した日本人は、後で判ったことですが牡丹江方面に進路を変え、炭坑で昭和二十八年から三十年頃まで働かされたようです。

松花江を優先渡河した私達重病人は客車に乗せられ長春へ。長春駅近くの病院別館へ重病人二十五名と付添い五名でした。が、重病人五名がここまで生き延びた疲れで死にました。病院の大八車に五人の遺体に乗せ長春市内を横断通り抜けた墓地へ運びました。墓穴料を払って埋葬するのですが、無一文なので困り果てていると、墓守が思い遣りのある方で、見ていないからこの穴に埋めなさいと言ってくれ、埋葬し黙祷しましたが何処の誰かは判らないのです。翌日、日本人世話人なる人を探して、無一物の事情を説明し大金を戴き、重病人二十名の必要品を買うことができました。

昭和二十一年十月初旬、この病院に入院の日本人が日本へ向け更に南下することになり、その中に開拓団の婦人で、ご主人が日ソ戦で兵隊にされ行方不明、婦人はこの病院で病死し五歳の美保子が孤児でいました。出発に際し誰かが美保子の保護者にならないと美保子は日本に帰れないのですが、誰一人連れて帰ると言う人がいないのです。そう、皆自分一人でも大変なのです。美保子の服には死んだ母親が書いた「迷子札」が縫いつけてありました。岡崎市の血縁先と名前が書いてあり私と同じ愛知県です。私は同じ日本人では考えられない親切を、中国人から数多く授けられ、助かり生きてきたのでその恩返しにと、美保子の保護者に名乗りを上げました。

病人ばかりの集団責任者にされ、貨車で長春から葫蘆島へ向け出発しましたが、途中から私が中国戦線で冒された風土病、回帰熱が一週間に一回四十度の高熱を発するようになり、頑張りながら幾日も役目を果たし、葫蘆島に着くや美保子と私を残し全員日本へ向け出港。私と美保子は取り残され入院。一カ月加療し十一月初めに病院船氷川丸に乗船、博多港手前でコレラ患者が出て幾日も上陸出来ず、前途に落胆ばかりだが、必ず道は開けると諦めませんでした。

名古屋駅に昭和二十一年十一月十五日夕方到着。我が家は空襲で跡形もなく、妻の実家も焼かれ物置きのような処に住んでいました。妻は私が背負っている美保子に驚き声も出ず呆然と立ちすくんでいましたが、私の説明に妻の弟が素早く反応して、美保子の家族を探し連れてきました。

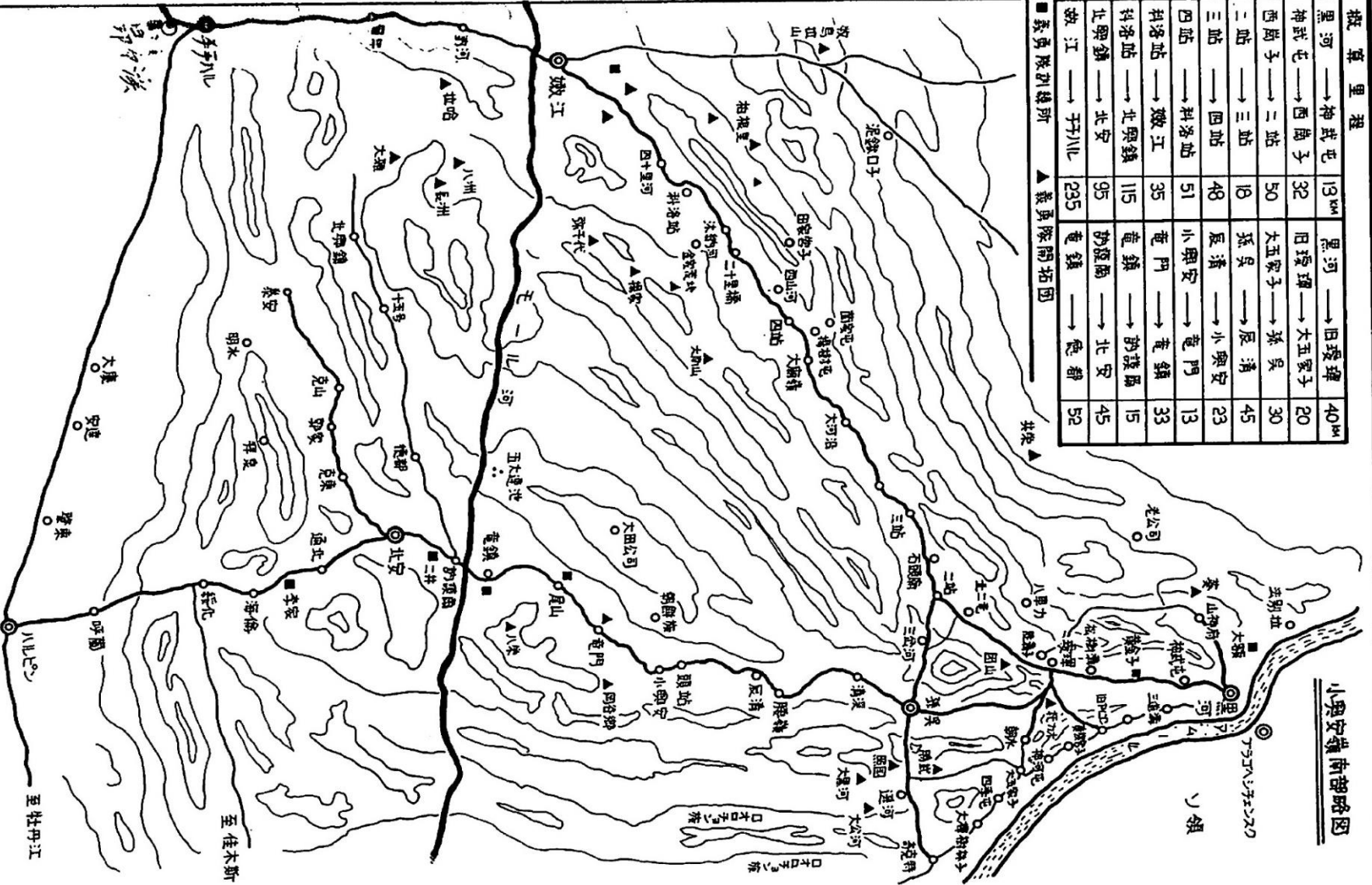
戦争は命令した人でやり、私達は逃げればよいのです。平和が一番ですよ。

概算里程

黑河 → 神武屯	13 km	黑河 → 旧瑛璋	40 km
神武屯 → 西崗子	32	旧瑛璋 → 大五家子	20
西崗子 → 二站	50	大五家子 → 孫吳	30
二站 → 三站	18	孫吳 → 辰清	45
三站 → 四站	48	辰清 → 小興安	23
四站 → 科洛站	51	小興安 → 屯門	13
科洛站 → 嫩江	35	屯門 → 屯鎮	33
科洛站 → 北興鎮	115	屯鎮 → 勃蘇屬	15
北興鎮 → 北安	95	勃蘇屬 → 北安	45
嫩江 → 牙力山	235	屯鎮 → 虎都	52

■ 孫吳陳列場所 ▲ 義勇隊開拓團

小興安嶺南部略図



軍国愛国少年の現在

佐藤 謙治

私は1927（昭和二年）に生まれた。四年後の1931（昭和六年）満州事変、その六年後の1937（昭和十二年）日支事変、更に四年後の1941（昭和十六年）太平洋戦争に発展し、遂に五年後の1945（昭和二十年）敗戦となった。実に私は戦争時代に育ったのである。

私は大分市で育った。近くに歩兵連隊があり、兵隊さんが家の前を行進したり、練兵場での訓練を見たり、あのもの悲しいメロディーの消灯ラッパを聞いたりして、私も歩兵にと憧れていたが、親戚の人が戦地より満期除隊で帰営すると我が家に泊り、戦闘の話や捕虜の首を切った話を自慢げにするので、いつしか歩兵は嫌だと思うように変化していった。中学校は川を隔てて大分海軍航空隊があり、戦闘機の離着陸や模擬空中戦は授業中でも興奮して見ていた。海軍の制服は格好良く、颯爽と町を歩いているのを見て、今度は海軍に憧れるようになっていた。

学校教育は軍国愛国主義そのものであった。歴史年表が教室に張っており、年表は神代から始まり、神武天皇になってから人の代になり、天照大御神の岩隠れや天孫降臨などを叩き込まれ今でもよく覚えている。後年、高千穂町の近くに住み、天の岩戸や岩戸神社を見た。天孫降臨で神々が雲の上を歩いて下りるのは、子ども心でも不思議でならなかった。ある時大分県側より祖母山に登り、高千穂町に下りたことがある。高千穂町は霧深い地形で、小高い岡から見ると霧に包まれ、その様子が天孫降臨の絵になったのであろう。

神々の名や歴代天皇の名を暗記させられた。戦後、その原典は古事記と日本書紀であると知りそれを読んで思った。神は日本人や日本国土を造ることはできない。神武天皇が紀元前六百六十年に建国したとある。然し、当時日本は統一も国家もされていない文字も持たない縄文時代である。これを裏付けるのは中国の歴史書「魏志倭人伝」である。三世紀の日本が詳しく書いてあって、「卑弥呼」が九州の一部を統治していた。私は小中学生の幼さもあってそれらをまったく知らず、教えられた通り信じていた。即ち、天皇は神であり、日本は神国なので優秀であり、世界を統治するにふさわしい、つまり「八紘一宇」にする。欧米が東洋を侵略するのを防ぐ、つまり東洋平和のための「聖戦」とした。

今思えば、それは国民を騙した教育であった。欧米が東洋諸国を侵略してい

た時、日本は侵略を防ぐのに天皇で統一国家にし、天皇の統一力を強めるのに天皇を「神」とし、日本を「神国」にした。そして我国を欧米の侵略から防ぐのに成功したが、余力ができるのと欧米諸国の侵略競争に参加したのである。

とは知らぬ私は、完全な軍国愛国少年に育てられ、中学を中退して飛行兵になった。猛訓練もあったがそれよりも苦痛なのは、気合いを入れることで、たえず殴られるリンチであった。勝ち目のない劣勢で気がいらだっているのかと思っただが、どの隊でもリンチは日常化し、最初の特攻兵も最後の特攻兵も出撃数日前にリンチされている。

愚かな作戦で多くは無駄死にするだけであった。沈没死、餓死、突撃死、そしてリンチから逃れる自殺死などである。特攻死は戦果は少なかった、はじめは飛行機の体当たりであったが、小型潜水艇の「回天」、爆弾を抱えて海底で待伏せの「伏竜」などである。しまいは爆弾に乗ってその名も「桜花機」オーカキが出来た。桜咲く四月沖縄戦がはじまり、特攻戦の最盛期になった。戦後、米国の映画を見ると殆どが撃ち落とされ、涙して見た。今でも桜が散るのを正視できない私だ。日米戦争は、米軍が戦争準備が出来ていない最初だけ勝ち、半年もすると大敗続きになり、米軍機は日本の多くの都市を自由に空襲し焼け野が原にした。私の家も焼かれ、山中の農家の物置きを借り避難疎開した。

戦後も私は愛国心を変えず国のため尽くそうとし、軍隊をなくした日本を守るため警視庁に奉職し機動隊員になり、国家公務員として定年まで務めた。然し権力者は「鬼畜」と罵った米英と敗戦後直ぐ親米になった。天皇は自分は「神」でないと言ったが「神国」でないと言わない。権力者は国のための戦争と国民を煽り、多くの若者を戦死させ、空襲で家や老人、婦女子を焼き殺されたが、戦争は権力者自身のためであった。それで、戦争の実体を公表せず、衆知させないで、戦争の主犯者を処罰せず、愚かな作戦者に勲一等を叙勲さえしている。

靖国神社を参拝するだけでは死者を騙したままである。つまり歴史を反省していないので「君が代」を復活し、愛国心を再び煽っているのであると、私はようやく気が付き、今、愛国心を放棄し「愛民心者」になった。定年後の生活は世の中のためにいろいろとボランティアをしているが、先の戦争は「聖戦」でなく「侵略」であり、「神話」も否定するために「魏志倭人伝」を語り続けることをライフワークにしている。そして私の大切な孫、曾孫を二度と私と同じような運命をさせないために、老骨に鞭打ち頑張っているのである。

八十年目の終戦の日に生△云えて

生還零の片道切符特攻飛行に、南弧の海へ敢然と出撃して征った下駄履き機の数々、幾百の勇士たちの御霊に、六十年の生命を頂き今日まで生きてきました。戦後六十年。今、改めて永遠の平和を誓い、この一文を認める。

二〇〇五年八月十五日

住田 豊信

★太平洋戦争開戦

昭和十六年（1941）十二月八日「大本営陸海軍部発表、帝国陸海軍は西太平洋に於て戦闘状態に入れり」「ハワイ、マレー沖に於て大戦果を収めたり」「勇壮な軍艦マーチに乗ってラジオから全国に流れた臨時ニュースだった。新聞も報道部発表に沸いた。日本中が沸いた。来るべき時が来た、そんな思いだった。この年四月私は、三菱名古屋航空機製作所へ希望に燃えて入社。しかし時局は日々に厳しい方へ進むばかりでした。

昭和十二年（1937）七月以来四年余になる日支事変は、出口の見えない泥沼の様子であった。国会は次から次へと新しい戦争遂行の法案が出され成立していった。ABCドラインと言われる連合国の経済封鎖、足掛け五年に渡る日支事変、国内の物資は食うもの着るもの等の生活物資がドンドン欠乏してきた。

昭和十五年（1940）四月から米・味噌・塩・醤油・砂糖・木炭等が順次配給制になり贅沢は敵、贅沢品の製造禁止令。そんな国内情勢の中の開戦。毎日、軍艦マーチのあとの大本営発表の我軍の華々しい大戦果の報道に胸踊らせながらも、大丈夫か？と一抹の不安を感じたのを覚えている。

私は大空へ、予科練へ憧れ、いつか自分も、自分の造った飛行機に乗って、アメリカ機を撃ち落としてやるぞと心意気は盛んでした。昭和十七年四月十八日、午後の機械工場はゴォーと単調な音が激んだ様な、少し眠気のある様な時間でもあった。窓の向こうで高射砲の射撃音、閃光と煙り異常を感じ外に出ると南から北へ黒っぽい飛行機が飛び去っていった。アメリカのマーチンB25爆撃機だ。その時西隣の組み立て工場の外で六角筒のエレクトロン焼夷弾が火を吹いた、直ぐ防火砂で消し止められたが、六角筒の一本や二本何にするものぞと思ったが、これが後に大きな束になり、焼夷爆弾として落とされるとは思ひもしなかった。米軍の日本本土初空襲であった。空母から飛び立ってゲリラ的に攻撃して中国大陸へ、テスト的な作戦であったろうと思われる。

五月になると全国のお寺の釣鐘、梵鐘、小学校の二宮金次郎の銅像や、学生服の金釦も供出。手持ち貴金属の献納が奨励され、郵便切手の弾丸切手が発売され、売上金は鉄砲弾増産の献金となる。

★戦局転換

昭和十七年（1942）六月五日ミッドウェー海戦の失敗で我が機動部隊は主力大型空母四隻を失い、同時に優秀な搭乗員の多くを失った。空母や飛行機の損失もさる事ながら、長年かけて育ててきた搭乗員を大量に失ったのは大損失だった。これを機に戦局の主導権は米軍に移ってしまった。南洋戦線でも、米英蘭豪連合軍の反撃が始まった。そして国民の生活もドンドン窮屈になってきた。

昭和十八年（1943）ニューギニア・ブナで日本軍玉砕、二月一日日本軍ガダルカナルから撤退開始。四月十八日山本五十六連合艦隊司令長官ソロモン上空で戦死。ミッドウェー海戦頃から日本軍の暗号電文が筒抜けのように解読されていたようだ。長官機の動向も敵側に知られていて、待伏せ攻撃を喰ったようだ。五月二十九日アリューシャン列島アッツ島守備隊山崎大佐以下二千四百名玉砕。米豪蘭ニューギニア・サラモア上陸「蛙飛作戦」と呼ばれる、島から島への作戦が始まる。十一月二十五日マキンタラワ玉砕。

昭和十九年（1944）一月マーシャル群島クエゼリン・ルオート玉砕。一月二十六日東京・名古屋・建物強制疎開開始まる。二月十七日トラック島空襲、艦船四十三隻、飛行機二百七十機失う。この時の敵機の数是我方の倍以上であった。三月八日ビルマ、インパール作戦開始、三月三十一日古賀連合艦隊司令長官パラオ島で米軍の襲撃を受け行方不明。六月十五日米軍マリアナ諸島サイパン島へ上陸。六月十九日日本海軍マリアナ沖海戦で空母の大半を失う。しかしどの戦闘も大本営は何時も「我が方の損害は軽微なり」であった。七月四日大本営はインパール作戦中止を命ず、ビルマの山奥に取り残された将兵たち餓死。七月七日サイパン島三万玉砕。八月三日テナアン玉砕。八月四日国民総武装令、竹槍訓練開始。東京学童疎開第一陣出発。八月十日グアム玉砕。十月二十日米軍フィリピン・レイテ島上陸。二十四日からのレイテ湾沖海戦で海軍の主力を失う。戦艦「武蔵」辛うじて沈没を免れる。十月二十五日神風特別攻撃隊レイテ沖の米艦隊を初攻撃。十一月二十四日マリアナ基地の米B29東京初空襲。十二月七日東南海地震マグニチュード8、震度6、レンガ建造の軍需工場倒壊し動員学徒大勢死す。名古屋地区の航空機産業大打撃をこおむる（沿岸地理め立て造成地のため治具（必要な道具）が狂う。

昭和二十年（1945）一月十三日三河地震マグニチュード7、1、震度7、死者2253人、倒壊家屋5233戸。両地震共厳しい報道管制。一月九日米軍フィリピン・ルソン島上陸。三月十七日硫黄島日本軍玉砕戦死二万三千人。四月一日沖縄本島上陸。四月二十三日沖縄日本軍全滅。兵十万。島民十五万

人死す。六月六日最高戦争指導会議（御前会議）本土決戦方針・一億玉碎。七月二十五日鈴木首相ポツダム宣言黙殺を記者団に発表。八月六日広島に原爆投下（午前八時十五分）八月九日長崎に原爆投下（午前十一時二分）平成十七年（2005）八月現在原爆合計数379,776柱。

★ソ連参戦満州侵攻

昭和二十年（1945）八月八日ソ連日本国に宣戦布告、翌九日攻撃。満州の日本人棄民扱いにされ犠牲者数知れず。八月十日未明「国体護持」を条件に「ポツダム宣言受諾を決定」八月十四日御前会議、ポツダム宣言受諾決定。中立国を通じて連合国へ申し入れ。八月十五日正午、戦争終結の詔勅放送（玉音放送）「本日正午重大放送あり、全員ラジオの前に整列」と本部より通達あり、熊本県人吉市の指宿農機製作所の工場で、隊長以下三十名位で聞く、初めて聞く天皇の声。詔勅の読み上げが進むにつれて、戦争に負けた降伏だ、悔しい、そんな思いの底に「戦争は終わった」なにかホッとした感じだった。

★憧れの予科練

昭和十八年（1943）十二月、お国のために飛行機造りに参加していても、もう一つ実戦に参加し、お国のために尽くそうと真剣そのものだった。父が病氣療養中なのに願書を出し、憧れの海軍飛行予科練習生を志願する。翌、昭和十九年六月五日父は五十二歳で他界。

♪ 若い命の 予科練は

♪ セツボタンと桜に 錨

歌で青少年を洗脳した憧れの予科練に入隊だ。

八月一日この日は大変暑い日で三重海軍航空隊に入隊。毎日火の出るような訓練が始まり、炎天下の陸戦は汗が乾いて塩の結晶が出来るほど。十日もすると全員真っ黒に日焼けし目と歯だけが目立つようになる。何もかもが戦場的に仕組まれ、座学の講堂に行く時も駆け足で「邪魔者は蹴り倒してでも行け！行け！」十七、八歳の若者がドンドン変わっていく。九月、特乙は和歌山県真言密教の聖地高野山へ、甲飛は奈良の天理へ。高野山航空隊はお山全てが航空隊、山全体が騒々しく、御大師様もお墓の下のお仏達も眠れない一年だったろうに。十月末、神風特攻隊出撃のニュース映画に全員泣いた。そして誓った。我らも後に続くことを。半年間お山を駆けずり回り鍛えられた。

★第四十一期飛行練習生

昭和二十年（1945）三月十三日予科練課程卒業、残雪光る高野山から、熊本県人吉航空隊第四十一期飛行練習生として移動。さすが飛練赤トンボが訓練飛行をやっている。出迎える教員が「あれは特攻要員の訓練だ、お前達は乗る飛行機も油も無し」希望に燃えてきたのに皆ガックリ。沖縄戦が真近い三月

二十五日人吉から鹿児島県指宿基地に派遣され、丸四艇基地とそれに伴う道路建設をさせられる。

指宿基地は魚見岳の断崖の下に在り、眼前に二つの島が浮び錦江湾（鹿児島湾）の奥に桜島の姿が在り海燕が飛び交い鶯の囀りも聞え絵のような景色だ。この一見閑然な佇いとは裏腹に、南西諸島、沖縄方面への偵察の最前線基地だ。今迄にない張りつめた緊張感の空気が漂っていた。赴任した第一夜の目覚めは「救助隊出動」の緊急放送で起こされた。片フロート片尾翼の零式水上偵察機が態勢を立て直そうとヨタヨタ揺れて飛んでいるのだ、偵察飛行で敵機に攻撃され被弾されているのだ。三日目は朝から敵航空母艦からの艦載機延べ三百機の機銃掃射の大空襲、炊事場の鍋釜が爆風で空高く舞い上がる凄まじさだ。それでも我等指宿基地は生きていた。対岸の鹿屋基地も爆撃されても特攻機は飛び続けていた。我々が指宿で敵機に爆撃されながら回復作業の頃、沖縄では、地獄の地上戦闘が繰り広げられていたのである。アメリカ軍の九州上陸を迎え撃つ準備で、海沿いの掛尾村の石塀を取り壊すことになった。村の古老が涙を流し両手を合わせて訴える「この石垣を壊されては台風の時化や高波から家が守れない、壊さないでくれ」と孫のような私達に手を合わせられる。古老の鹿児島弁は全然理解できないが、訴えている意味は理解できる。我々は心を鬼にして黙々と壊してしまった。村人達は敵からも日本兵からも命をないがしろにされていたのだ。

★特攻基地指宿

敵機の頻繁な空襲にも屈せず特攻機は沖縄へ飛んだ。神風特別攻撃隊菊水四号作戦は四月二十九日から七月三日までに十二次、四十四機八十二名。飛行機の不足から零式水上偵察機は八百キロ爆弾。零式観測機には二百五十キロ爆弾。九四式水上偵察機は複葉の練習機で爆弾装填器具がないのでフロートの間にワイヤーで五百キロ爆弾を縛り付け、重くて水上滑走から離水出来ない姿が痛ましかった。対岸の鹿屋基地からは、桜花特別攻撃隊が我々の頭上を一式陸攻に抱かれて沖縄へ向かって行った。桜花は約一トンの爆装をした、爆弾に翼を付けたロケット機で操縦者共々の体当たり機であった。勿論、親飛行機諸共、生還機は皆無だった。

★基地壊滅

五月五日午後四時頃入浴の順番がきたが、入浴もおっくうなほど疲れきっていた。町の方から空襲警報のサイレンが聞こえたと思ったら「待避！待避！」と叫んでいる、ハッと目を上げると今迄見たこともないような超低空飛行のB29の編隊。爆弾倉が黒く口を開け中からバラバラと黒い粒がこぼれた。咄嗟に道端のボイラーの陰に避難、爆弾の空気を引き裂く落下音。爆発音と共に背

中に土砂が降りかかりボイラーにも飛び散りボイラーがガンガンと鳴る。胸の御守袋を握り「親父助けて」と心の中で叫ぶ、五日は親父の月命日なのだ。六名の戦死者を出し、B29十一機の一舐め空襲で指宿基地は壊滅した。

★原隊へ

五月半過ぎ六名の遺骨と共に人吉の原隊へ帰る。暫くは次の任務を待つような日々を送る。南方戦線での戦闘体験から、衣服の白色は目立ち目標になるからと、虱退治を兼ね煮詰めてヨモギ色に染める。二種軍装の真っ白な夏服の七つ釦から禪まで染め、白いものは一枚も無くなった。やがて各地へ十人、二十人と派遣され、私達五名は人吉市内の「※丸総兵器」の鋳物工場へ、工場名は「指宿農機具製作所」指宿から来た私には懐かしい呼名だ。宿舎は花柳界の見番跡。宿舎から工場まで三キロを駆足で通う。途中市内を流れる球磨川を渡り城跡の横を走り抜け工場へ、今にして思えば、道中も町中も男は兵隊だけだったと思えた。

※丸総兵器Ⅱ総玉砕兵器の略Ⅱ女や子どもが手榴弾を隠し持ちアメリカ兵に近づき爆発させ一緒に爆死も国民総玉砕特攻作戦。爆弾のない時は竹槍特攻作戦

★鋳物工場

工場では擲弾筒や手投げ弾の弾体を鋳物で造る作業だ。米軍の近代兵器に対して手作りのこれで対抗出来るかと不安な日々で生産に励んだ。パイプの銃身に丸い球で射程三百メートル程の銃。木製銃の先に槍を付けたたり、竹製の鉄？カブト。手投げ弾は弾体の底に木栓を嵌め込み信管はないから導火線をマツチのように擦って発火させ投げる。

こうなると戦国時代の火縄銃の方が優秀な鉄砲に思えてくる。沖縄戦が終わり、次は鹿児島か宮崎に上陸かと海岸線に敵の上陸に備え「※丸四艇震洋特攻・蛸壺特攻・伏竜特攻作戦」等。本土決戦、一億玉砕の御前会議の方針に沿った作戦が〇〇特攻の名で打ち出されるが中味は体に爆弾を縛り、水中や穴、木の上に隠れ敵が来たら体ごと爆発させるのだ。五月から八月は米軍の日本全国焼土作戦で焼夷弾により中小都市も標的にされる。

※丸四艇震洋特攻Ⅱ爆弾を積んだ丸木舟又はベニヤ板舟で体当り爆死兵器。

※蛸壺特攻Ⅱ爆弾を体に付け掘った穴に隠れて爆発させる体当り爆死兵器。

※伏竜特攻Ⅱ爆弾を体に付け潜水して敵を待ち爆発させる体当り爆死兵器。

もう誰もが口には出さないが勝てないと思っっているのに、上層部だけは元氣いっぱい我ら特乙九期生は飛行兵長に進級と命令が来た。本隊から本物の歩兵銃が弾無しで三丁。槍の付いた木製銃十三本と何個かの手榴弾が届けられ、兵長に進級した私は後輩訓練生を指揮するように命じられ、宿舎と鋳物工場の行

き帰りは「駆け足」と気合いを入れ走らせていた。

八月六日広島に、九日長崎が新型爆弾一発で全滅したらしいはデマらしいが、白い衣服を着ていると光を反射させ助かると噂が流れた。だが我々は誰一人白い衣服は持っていないのだ、皆ヨモギ色に染めていたのだった。そんなこんなの日々の中で八月十五日を迎えた。

★敗戦復員（復員＝軍隊の組織を解いて故郷に帰ること）

敗戦で分隊士は切腹すると大騒ぎ。本部へ物資を受取に行くと、前任下士は背広姿で扇子を使いながら「軍服など着ていたら捕虜にされるぞ」と持ち帰る荷物を造っている。私は未使用の棺桶に受取った荷物を入れて帰る。書類は焼け、武器弾薬は米軍に渡すなど、鋳物工場で作った完成、未完成の武器を球磨川に沈めた。三重海軍航空隊以来泳いでいないので楽しみながら川底に沈めた。手榴弾を球磨川に投げ爆発させると大量の鮎やウグイが浮び、タモを持った子ども達が下流で待ち構えていて掬う。昨日迄の米軍との攻防戦が嘘のよう思える。

焼却したり川底に隠し終えたので、荷物を纏め人吉駅から名古屋へ！、貨物列車に乗る。熊本の手前で鉄橋が爆弾で破壊されていて徒歩連絡。次に乗った列車は門司止り。列車はどれも超満員でぶら下がったり屋根にも乗っている。そこで炭水車に乗る、最初は石炭が満載で安定な場所と喜んでいたが、走るに連れ石炭が焚かれ足下から崩れ始め、座ることなどできないし、荷物がずり落ちて採炭口を塞ぎ機関士が怒鳴る。次の機関車の取換えで機関士の制止も聞かず、機関車の横に乗る。パイプが何本もあり蒸気用と水用に区別され、熱くないパイプを選び掴まる。広島駅の二た駅手前辺りから、家屋が広島の反対側に傾き、広島に近づく程に傾きがひどくなり、遂に家屋が潰れ、やがて瓦礫の焼け野が原にされた広島に着いた。定員オーバーで機関車や屋根にまで乗っている誰一人として「死の町」にされたヒロシマを見に行く者は居なかった。悲惨！。

姫路で乗換え傷痍兵の乗っている貨物列車で大阪へ。八月二十五日名古屋のプラットホームに降り愕然とした。故郷名古屋は広島と変わらぬ焼け野が原が広がっていた。違いは「死の町」にはあった「放射能」がないことだった。

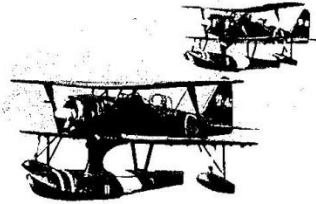
★帰郷し暫く無気力の放心状態つづく

日清戦争、日露戦争も日本は海を渡り「敵」と呼ぶ国で戦争をしてきた。航空機の進歩は戦争の戦略も変え、緒戦は航空機で真珠湾を攻撃し成功した。そして、航空機で日本全土が焼かれ戦争が終った。

昭和六年（1931）満洲事変で始まった十五年戦争は、二千三百十六万人と膨大な犠牲者であった。この犠牲者のあとの懺悔の平和憲法によって今の日

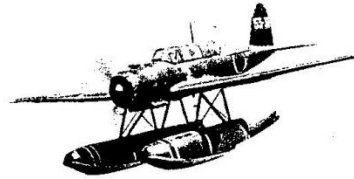
指宿基地より発進した特攻機と基地で活躍した水上機

大本営は戦闘機よりのろまな水上機までも特攻機にして無駄死者を増やした



零式観測機

特攻機で250キロ爆弾積載

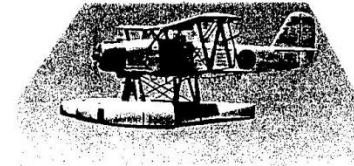


零式水上偵察機

特攻機で800キロ爆弾を積載

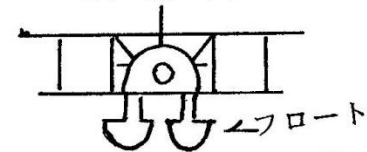


二式大型飛行艇



94式水上偵察機

正面図



500キロ爆弾をフロートの間に
ワイヤーで緊縛した
フロート→水上機の浮舟

鹿屋基地から飛び立った非人間的兵器人間ロケット爆弾

特別攻撃機「桜花」11型

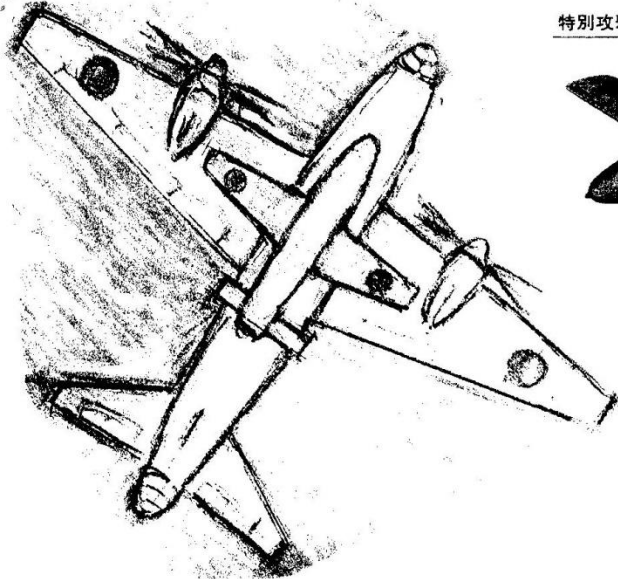
(乗員1名)



特別攻撃機「桜花・オーカ」

ロケット推進の人間爆弾

海軍一式陸上攻撃機の腹に図のようについた母子飛行機。先端に爆薬1200キロ装填し上空で母機から離れ敵艦に向かう。
途中敵戦闘機に母機もろとも撃墜された。850機生産の記録あり。



本がある。
日本国憲法を世界の平和な国の手本と成るように努めなければならない。多くの犠牲者の魂（みたま）に誓う。

戦争展から思う「平和」と言うこと

大川 孝次

昨年は終戦から数えて丁度六十年ということもあって、どこかしこで戦争展が催されました。私はメディアで、開催の知らせがある毎に、ほとんど参加してきました。それは平和に対する戦争展に段々と疑問を持ち始めてきたからです。決して無責任に戦争展を非難、誹謗しているわけではないのです。一生懸命に平和運動をしている開催者に対して単なる冷やかしかや批判はしたくなかったからです。

まじめな気持ちで真剣に考えみても疑問を感じるわけです。果たしてあのような戦争中の遺物を並べ（確かに在る程度は解説や説明はありますが）た位で戦争を抑止し平和を願う気持ちが若い人たちに湧いてくるだろうか？という疑問です。見学に来る人を見ると、ほとんど戦争を経験したであろう高齢者ばかりです。若い人は、ほとんど見に来ていません。それなのに相も変わらず戦争中の遺物を並べ、それがあたかも平和運動に効果があるように思うことに疑問を感じる訳です。また語り部も戦時中の悲惨さを訴えています。が、悲惨さも年が経るにつれて演出っぽいものになってきてるように感じ、演説口調のお説教になっていきます。何故それがわかるかと言えば、私自身も静岡と清水で二回の空襲を経験しているからです。戦争展に並べられている遺物にしても、それがどんな意味をもつものであるかが、わからないままに陳列されているのにも、気がかかります。

一つの例ですが、ある会場で爆弾の破片が真綿にくるまれて小箱に納められ陳列されてありました。見学者は、その錆びた鉄片に何の興味も示さず通り過ぎていきます。然し実際空襲を経験した私にとっては、わずかな、その鉄片にも憎しみを感じるのです。炸裂した切り口が、ぎざぎざになって原始時代の鏃（やじり）のようになって傾斜して裂けているのです。こんなものが身体に突き刺さった事を想像してみてください。一人でも多くの人を深く殺傷するように炸裂の仕方が工夫されて作られているのです。そんなことを説明する人もいません。

名古屋市博物館での戦争平和展には一個のブリキのバケツが陳列してありました。赤く塗られ白字で防火用と書かれていた何の変哲もない防火用に使ったバケツだと言うことだけはわかります。ただそれだけです。そのバケツが「どんな馬鹿げた戦争」をしたのかを物語る最たる証拠品であるにもかかわらず、誰も気が付かぬまま通り過ぎていきます。当時の防空演習は防火用水からバケ

ツてくみ出し、隣組の人たちがバケツリレーで水を屋根まで運び撒いて消火訓練をしていたのです。空襲が激しくなるとB29爆撃機は空一面、真っ黒に覆い尽くす位の数で飛んできて、爆弾や焼夷弾を雨あられの如く落としていったのです。それなのに日本ではバケツリレーで水を屋根に撒いていたのです。そのとき使ったバケツなのです。

時々六角の筒状になった長さ六十センチくらいの焼夷弾が陳列されている事があります。エレクトロン焼夷弾といって粘状ガソリンが充填された焼夷弾です。日本の家屋は木と紙で出来ているから燃えやすくするために、わざわざ日本向けに作られた焼夷弾です。当時は男性は軍隊か軍需工場で働いていましたから、家には、年寄りと女性と子どもしか居ませんでした。ということはアメリカ軍は、年寄りと女と子どもを焼き殺すために作った焼夷弾だと言うことです。

戦争の残虐さを表現する定番のように原爆のことをいわれますが「広島」「長崎」ばかりが残虐さの代表ではないのです。それにも劣らない残虐さは、長崎、広島以外でもいくらかでもあることを知って欲しいのです。それなのに爆弾がドカドカ落ちてきた話とか食料事情が悪く団子汁や雑炊ばかり食べた話など決まり切った同じ話ばかり毎回聞かされ現実離れをした。よその国で起こった出来事のような話では若い人たちが、どんどん離れて行くのではないかと思うのです。

今の子どもたちは戦争は、どこか全く関係のない国で起こる出来事と思っているのではないのでしょうか。実は今学校で起きている「いじめ」や「差別」や「思いやりのなさ」「自己中心的な考え方」が、戦争に発展することを教えるべきです。本当に戦争は、やってはいけないと思うならば、弱い者いじめや、自分だけよければ人はどうなってもいいという自己中心的考えをしないこと、人に対して思いやりをもつ事が平和につながる事なのです。

戦争は決して私たちと無関係な遠い所で起きるものではないのです。社会的に弱い人たちや外国人を差別したりすれば、日本でも、いつでも戦争が起きる可能性のある事を若い人たちに教える事が本当の戦争を経験した者の責任ではないでしょうか。

戦禍の下五歳児の刻印

多田 代志子

私は五歳のとき、当時【※外地】と呼ばれていた満州（現〓中国東北）で敗戦を迎えた。敗戦と同時に全財産を喪失、逃避者になり常に生命の危険に晒される立場に転落した。

『死』が日常茶飯事だった。五歳の子どもの前で毎日何人が死んだ。敗戦後の避難所で亡くなり近くの土に埋められた人、引き揚げの徒步行進中に息絶え、そのまま道端に置き去りにされた人、引き揚げ船上で亡くなり毛布に包まれ海に投げ込まれた人。数えきれない日本人の身近な死者の姿が、いまでも脳裏に焼きついている。多くの目の前で『死』の中であって、私自身の体験した「生の極限」の状況もしっかり記憶にある。

その一つは、敗戦の年の冬の満州でのこと、私は母と他の難民と一緒に、大きな共同作業場のような農家の廃居で生活をしていて。食料は、アメリカの支給による飼料用大豆の搾り滓（家畜の餌）を削って炒ったり煮たりした主食だった。誰もが栄養状態が悪く、赤痢、疫痢、コレラなどの伝染病がはびこり、治療薬もなく、子どもも大人も、一人、また一人と生命（いのち）を落としていった。

私は、伝染病に罹ったかどうかの記憶はないが、手足の指が内側に曲がり物が掴めなくなり、四肢も関節部分で折りたたむかに曲がってしまい、ちょうど母体内にいる胎児のような姿の奇病に罹っていた。痛みはなかったが、常時意識が朦朧としていた。というか、ほとんど眠っていて、ときどき目覚める程度だった。目覚めたとき、「もう、この子も終りだね」という周りの言葉を耳にし、次に目覚めなかったら死んでしまうのだと思っていた。だが、次の目覚めると、「あ、まだ生きていたんだ」と嬉しくなり、翌日も翌々日も、しばらくの間意識が戻ると、「ああ、よかった！もっと生きていたい。もっと生きていろんなことを見聞したい」と思うようになった。周りの人の「この子の生命しぶといね」との囁きのなかで、親切な人のはからいで、卵と青菜を貰い、生きのびた。

引き揚げ貨物列車の中での記憶も鮮明である。身も心も衣服も疲れ果てボロボロになった引揚者は、無蓋貨車に荷物さながらに詰め込まれ身動きもできなかった。私は母にピッタリと身を寄せ、力なく目をつむっていると、急に周りが騒々しくなった。

「その子あぶないぞ！水を飲ませなきゃ」「水を持っている者はいますか」「水！」朦朧としながら、うつすらと目を開けると、母の方へ水筒が手渡されていた。「早く飲ませてやりなさい」「ありがとうございます」母は受け取った水筒の水を、私の口に流し込んだ。一口の水が口中を潤し、咽喉に流れ落ちた。二口、三口と飲んだとき、胃から体中、四肢の末端にまで流れ行き、萎えて脱力状態だった体が、瑞々しく生き返った感じがした。心の中に「また少し生きのびられる」との思いが湧いた。

避難所を転々とするうちに、私は何度も残留孤児にされそうになった。ある日、中国人の家で、温かい大きな饅頭を貰って食べたあと、母が言った。「今日はこの家で泊まるのよ。日本人の子どもを泊めているのがわかると困るから、隣の部屋の甕の中に寝なさい」毛布に包まれ甕の中にすっぽりと入れられたとき、私は直感で母に置いていかれると感じた。幼い子は雅拙で未熟だから、単純なことを信じると母は思っていたらしいが、敗戦後の恐怖の中に置かれていた私は、危機感を咄嗟に察知できた。

母が部屋から出ていくと、寝たふりをしていた私は甕の中から抜け出して、明り取りの窓の下で、一晚中耳をそばだてて起きていた。夜が、うつすらと明けはじめたとき、外で物音がした。私は大急ぎで窓から飛び降り、辺りを見渡した。母が荷物を背負って一人で出かけるところだった。私の姿を見た母は驚き、戸惑った様子で、「外の様子を見ているだけよ」と言った。私は、幸運にも母について行くことができた。

五歳の私は、生命の危機と恐怖の中で、持てる能力を総動員させ続ける緊張の連続にあった。

引き揚げ船から【※内地】日本に上陸し、ほっとして祖母の家へ向かう列車に乗ると、「引揚者だね、ご苦労様。どうぞ」席を空けてもらった。腰掛けると、向かいの席の人が、竹の皮に包んだおにぎりを開いて食べようとしているところだった。それを見つめていた私のお腹がグーと鳴り空腹を感じた。牛や豚の餌大豆粕や、食べるものがなく水だけの時にさえ、ひもじさを感じなかったが、日本に辿り着いた途端、緊張感から解放されての空腹感であった。

当時五歳だった私は、今よりももっと深く、生命の本質や危機の直感を純粋に感じ取っていたと思う。今、私は六十六歳。

※内地Ⅱ侵略戦争前の日本国。※外地Ⅱ侵略し植民地化した領土、台湾・樺太・朝鮮半島・満洲などから日本を指す言葉。

女学生の戦争体験

能村とし子

昭和五年、私は富山県に生まれた。小学生のころ富山県でも食料難が始まり、週三回、学校から近くの里山で「どんぐり」を拾い集め、粉末にして食べ物に入れたり、野草の中から「センブリ」「ゲンノショウコ」など薬草を採取し、乾燥して供出しました。

戦争が深みに入り、昭和十八年学徒動員令で、中等学校三年生以上の生徒を農業・工業の作業員に学校単位で送り込むようになり、男女も深夜業、一日十時間労働になり、私達の学校も、砺波市の石川島播磨重工業へ飛行機のエンジン製作に動員されました。「神風」と大書した鉢巻をしめて、昼夜二交代で、部品をヤスリで削り、ゲージで規定の寸法を調べる仕事でした。

若さだけの女学生には、油で汚れ、きつい、辛い仕事でしたが、純粹であったので、戦争に勝つために一生懸命でした。お昼の食事は、芋、大根などが主で、雑炊でなく水煮野菜食のようでした。皆、とても空腹でしたが、おいしく頂きました。今から思うと、「混合食」だったので、かえって栄養的だったかも知れませんが。皆、痩せていました。そして世は「鬼畜米英」と盛んにあおっていました。敵国語英語はすべて禁止でした。「ボール」は「球」と言うように、日本語に溶け込んだ「ケーキ」「キャンディ」も絶対禁止になりました。

戦局は益々敗色濃くなり、私達山間部でも上空にB29が来襲し、近くの都市の夜空を真赤に焦がしていました。焼夷弾が雨、霰のように降り、私達は始めて事の重大さを知り、いろんな「デマ」が飛び交いました。富山県では伏木港から敵が上陸し攻めてくるから、私達の山間部へ避難すると、人心の不安を煽りました。

沖繩のように、敵の上陸も攻撃もなく敗戦を迎えました。戦争と女学生の私達は女学校で何を学んだのでしょうか。何一つ、勉強らしいこともせず、卒業を迎えました。人生で最も多感な年代、知識を身に付けるべき年代を戦争に翻弄されてしまいました。でも、貴重な経験も積みました。すべて運命です。この上は、残り少ない人生を、人間らしく、有意義に生きて、今の若者に戦争の「無駄さ」「悲惨」さを少しでも伝えられたらと、念願しています。

支那事変の最初を戦う

木下 秀磨

私は1915（大正四年）生れの九十一歳です。ですから、日米戦争や支那事変以前に兵隊なりました。1935（昭和十年）満二十歳に達し、国民の義務である徴兵検査。当時の国勢調査によると、徴兵適齢者数659,522名。内、633,886名が徴兵検査を受け、甲種合格者188,460名。全員徴兵せず、定員数外は「クジ」で落としたので『クジ逃れ』の恩典語を生み出す、軍国主義の時代でも比較的平穏な頃だったと思う。

前述のように徴兵検査を受け甲種合格。昭和十一年一月十日、台湾歩兵第一連隊に入隊し、陸軍歩兵二等兵となる。軍隊は「♪兵隊さんは辛いのもうまた寝て泣くのかよー」の消灯ラッパで寝るのだ。中隊長は「戦場では待ったなし、殺すか、殺されるか、二つに一つ。暴風、酷暑、酷寒処嫌わず、極限の世界に耐える身体と、肝っ玉の精神力を発揮するための訓練」と称し、耐え切れず、脱走、自殺者あり。

軍隊は一年を三カ月づつ四期に分割し、私の場合は一月十日入隊だから、四月九日迄が一期。四月十日以降三カ月が二期となり、一期の検閲、二期の検閲と、各期毎に訓練が組まれ、二期が終る頃、上等兵候補、毒ガス班が約三十名他に縫工・靴工・衛生・ラッパ・炊事・鍛工等に各二名づつ。また、厩当番・軍犬・軍用鳩や、字の奇麗な者は事務として連隊付、大隊付、中隊の事務補助要員になる。軍隊の戯れ唄にも、戦場で死なない順番を、1にヨーチン2にラッパとか、事務を「インキ壺」と呼んで下げすんだ隠語がある。

私は、縫工兵としてミシンで衣服の修理に当る。衣服は破れ十糎までは自分で修理、十糎以上は縫工へ修理に出す仕組みだ。真面目な上官は規則を守り、ズボラな上官は兵の一糎の破れを十糎以上に破り縫工へ出すので、ズボラな上官を持った兵ほど案と手抜きを覚える。こうして二期が終わる頃、ズボラで手抜きを覚えた兵は要領も身に付け優秀兵として一等兵に早く進級する。が、一等兵に進級しても、内務班には理由もなく、その時の気分で殴る古兵がいるのだ。縫工長はそれを知っていて、縫工場で時間潰しを許してくれた。縫工長は「戦場では縫工自動車が準備されており、お前達はそれに乗り、車と共に行動縫工する」と、だが、戦場では一度も見たことも聞いたこともなかった。

※古兵Ⅱ階級は下から二等兵・一等兵・上等兵の順。最低の二等兵は、一等兵を古兵殿、二年目の一等兵には二年兵殿、三年目には三年兵殿と呼ぶ。

三期も終り、四期は連隊、大隊の射撃・銃剣術大会や野外演習に追われ、鬼の古兵が除隊し私達の天下になり、兵器・衣服・私物等の検査で一年が終る。

正月は晴れて自分達の天下の気楽な正月。新兵の受け入れ準備も済ませ、四月には縫工場通いも後輩へ引き継ぐ。衛兵勤務や将校当番を交代制で繰り返し、満期除隊を楽しく指折り数えて待つ。何の前触れもなく除隊延期になる。

昭和十二年七月七日、中国北京の近く盧溝橋で、日本軍が中国軍を刺激する軍事演習を行い、挑発して戦争を始めたのだ。世界には大きくさせないと言いながら、軍隊を増強し「支那事変」に発展させているのだ。

昭和十二年八月十四日、台湾も防空迎撃体制に入る。翌、十五日、上海派遣軍司令長官松井岩根大将任命さる。同月二十二日第三師団（名古屋）呉淞（ウーソン）敵前上陸。翌、二十三日第十一師団川沙口に上陸。九月七日、台湾の日本軍上海派遣決定。平時編成から戦時編成に組み替え。歩兵の一個中隊百五十名が二百名に、歩兵は小銃・擲弾筒・軽機関銃・重機関銃・歩兵砲で一個中隊を編成。四個班は三個小隊に長は少尉に、小隊は六ヶ分隊、長は軍曹か伍長に。私は擲弾筒班だ。急遽招集された補充兵が続々集まりテンヤワンの大騒ぎの中で編成が終る。休み間もなく全員、自分の認識番号を書いた封筒に、頭髮と爪を切り入れて提出する。

※認識番号は兵一人一人に番号が付き、死んだ時の早分かりに使う。四纏ほどの楕円形の真鍮製板に数字が刻印され、穴に紐を通し首に下げる。腐蝕に強い。衛生兵は、死者の首から認識票と小指をペンチで切断し布袋に入れる。袋の中は小指と認識票が同数。遺族には誰かの骨が渡される仕組。これを軍隊用語で「員数合わせ」と言う。認識票が回収されない時は、封筒に入れた頭髮と爪が遺族へ渡されるのだ。

軍装は、演習では背囊であったが背負い袋だ。衣類、食品、乾パン三食分、靴下を袋に米を1キロ入れる。軍靴の底は鉄の鋌で、中国の街は石畳でガチャガチャ音を出し、居場所を教えるのでゴム底の靴を履き、九月十二日基隆（キールン）港より駆逐艦で東支那海を北上。艦隊は等間隔に二列縦隊、十四日揚子江の河口、貴陽湾上陸。軍艦だったから敵前上陸と思っていたら、抵抗なしの無血上陸で、すでに日本軍に焼かれた散居村の焼け跡に宿営する。

上陸し上海戦に投入された、水筒の水もなくなり喉は渴くばかり、目の前のクリークの水は飲むなど厳禁されている。流れもない泥水に生活排水が溜まり、異臭とボウフラの巢だ。渴きに勝てず闇夜を味方に塹壕を出て水筒に汲む。タオルを幾重にもして濾過し飲む。夜が明け、塹壕を右に曲がり、クリークの

吹き溜りを見ると、中国兵の死骸が数十体浮かび、蛆虫の餌にされていた。

昭和十二年十月五日戦場は東へ移動し、各自身を隠すタコ壺を掘る。二メートルほどに敵砲弾爆発。左肘と右肩に激痛が走り、十数名負傷する。介護兵に守られ後方へ護送中も二回の迫撃砲を受けるも二次被害なし。野戦病院は重症者から治療を受け、照明はローソクの明かりだ。軍医が私に「お前は足もやられている下着を脱げ」左大腿部貫通。右大腿部も同じく膝上十厘の裏側を貫通し、反対側から小豆大の破片摘出し「お前は幸運な奴だ、ミリの差で静脈、動脈の間を弾が通り、危ふく出血多量で死ぬところだった」と。

更に後方の病院へ移され、軍医が「今日は快晴だから全員外に出て包帯を解いて傷口を太陽に晒せ」と。互いに傷口を見せ合うことになる。戦争の傷は実に不思議な傷が多い。鉄兜の横を貫通した弾は頭と兜の間を数回駆け回り、兜の紐を取り付ける金具から外へ、頭は渦巻き状の傷だ。正面から兜に当たれば即死だったのになんと幸運な奴。極めつけは理解できない場所と負傷状態だ。炸裂した砲弾の破片が男性シンボルの先端だけを奇麗に切り落としている。

七日ほどで上陸した散居村に担送（担架で移送）テント病院で土の上に藁が敷かれた上に毛布が広げてあるだけだ。ここで十一月五日、日本軍が揚げた《皇軍百万杭州上陸》の大アドバルンを遠望する。そして上海はあの当たりかと話し合う。中国を威圧さす作戦のアドバルンが戦後侵略の証拠にされる。即ち、天皇軍が海を渡って中国領土へ上陸し、南京大虐殺をした。と。

この土間病院で、凄惨な地獄絵図の形相を見聞する。多くの兵は私と同様、死体の浮いた腐ったクリークの水飛沫を体に浴びて負傷だ、破傷風・ガスエソで治療薬もなく死を待つのみ、「衛生兵殿、看護兵殿」と、どのテントからも叫び声がしているのだ。耳を塞ぎたくなる毎日、そんな時、私の属する部隊が呉淞（ウースン）に集結と聞き、軍医の制止を振り切って合流する。

部隊は、次の作戦準備中で小隊長は「木下、急ぐことはない、これから向かう戦場は一大湿地帯だから、お前の傷口悪化の可能性大だ。帰れ」と、上海の病院へ転送手続きをしてくれた。上海の日本租界内の紡績工場の倉庫を病院に改築した広い病室。初めて負傷兵専用の白衣を着せられ、患者らしい生活となる。先輩患者は厚紙で、囲碁・将棋・花札・トランプ・麻雀牌まで作り、軍隊の階級もゆるやかで治療を楽しんでいる。驚いたのは陸軍一等兵が、蓄音器とレコード盤を持ち各病室を「慰問に参りました」と、レコードを聴かせて、夕方帰って行くのだ。あれでも帝国軍人かと腹が立つ。治療天国で「戦争なんか馬鹿らしくて出来るか」と、うそぶく兵もいる。

1937（昭和十二年）十二月十日原隊復帰。翌年四月初旬より、大湖の南方方面の三州山討伐戦始まる。昼夜の別なく行軍に継ぐ行軍で「小便一町糞八町」の言葉が生まれる。また併進する他の部隊から闇夜に「殺せ！殺せ！」の呻き声も聞こえる。

七月から揚子江遡上作戦の湖口城作戦では、後続の食料武器補給部隊との間を中国軍に断ち切られ、十日ほど飢餓状態、軍用機で弾薬食料の落下傘補給を受ける。食料は最初は鰯の缶詰が続き、今度は牛缶だ。一カ月も続くと嫌気がさし、見ただけでポイ捨て。野草を揉んで食べるも塩なしなので喉を通らない。本当に塩の大切さと有り難さを知る。缶詰類は戦後三十年余は見るのも嫌で食べられなかった。

ついで、避暑地で有名な口山の東端の岳の上から、九江方面から大勢の敵兵がワイワイ騒ぎながら、バンヨツ湖方面に行くのを静かに見下ろしていた。私達は目の前を、大声で話し合いながら行く敵兵を攻撃する力も、気力も喪失しているのだ。この敵集団が私達の後続部隊を壊滅させたのだ。私は、岳の上で空腹と極度の疲労から失神。九江病院に収容され。回復後。昭和十四年十二月除隊した。

大空に散った若桜

木場英一郎

私は、1926（大正十五年）生れの八十歳である。私の年代の多くは、若くして異性を愛する喜びも知らず、天皇陛下のために死んでいった。私も、死ぬべき特攻隊員として、鹿屋基地で出撃下令を待ったが、遂にその機会が来ず敗戦となった。敗戦後の私は、出撃していった同僚の無念さに、なにをどうしたらよいかわからず、荒れに荒れ、世間からは「特攻隊崩れ」と下げすまれた。私を救ったのは、私の地元、鹿屋に航空基地資料館をの願いだった。

今、六十年を静かに振り返り、多くの死者にこの一文を捧げる。私は決して、特攻隊を美化賛同する者ではない。戦争は人間の生命と尊厳を容赦なく抹殺する、残酷非情な争いである。神風特攻隊の中にいた私も、あの神風特攻隊は正しくその典型であったと思っている。

太平洋戦争末期の昭和二十年三月、鹿屋海軍航空基地に、第五航空艦隊司令部（特別攻撃隊司令部）が設置さる。司令は、山本五十六長官の下で参謀長で

あった宇垣中将。大分・宇佐・宮崎・高知・徳島の各航空隊を統括し、特攻出撃をコントロールする中心基地であった。昭和二十年四月六日の菊水一号作戦から、六月二十二日菊水十号作戦まで、沖縄海域のアメリカ機動部隊に対して、片道燃料特攻出撃が決行され、文字通りの肉弾戦となって散華したその数、八百二十九人の内、十八、九歳の少年達が多くを占めた。

基地は、連日連夜アメリカ空軍の爆撃で、格納庫は鉄骨だけに、掩体壕を造り飛行機を避退、司令部も機能せず、長官達は地下壕から出撃命令。兵は、三角小屋から四キロ離れた小学校を宿舎にして、司令部からの出撃命令を待つ。出撃指名は死への指名でもあり、待つ身の兵は各人各様の精神状態であった。

一時間でも早く死んで楽になりたい。アメリカ軍が飛行機を全滅させてと願う者。生き残れる奇跡を心に念じる者。運命の時計の刻む音がそのまま死への足音。精神的に追い詰められピストル自殺する者。等々。福岡出身の某は、面会に来た二十歳の女性に「死にたくない」と、言い切り「俺が死んで、三年忌が過ぎるまで、結婚は控えてくれ」と、頼む。五月二十一日特攻死、二十二歳だった。

某は、出撃前夜隊長に呼ばれ「明日出撃だ、家が近いから家族と最後の別れをして来い」と。出迎えた母に、玄関に咲く桜の枝を手折り渡し、祖先を尊ぶ仏壇の前に正座する父へは、予科練のシンボルでもある、首に巻く純白のマフラーを差しだし、無言で受け取った父は、黙って仏壇に供えた。別れを惜しみ来宅した隣組の人達は、『生き仏を前にした、お通夜みたいだった』と、話し合った。出撃時分は、翌日、四月二十九日天長節の午後二時二十分。享年二十歳の若桜であった。

1945（昭和二十年）六月二十三日アメリカ軍沖縄制圧、特攻司令部を大分の後退さす。海軍最後の出撃は、茨城県百里基地から決行された。攻撃目標は、千葉県銚子沖南東四百キロの、アメリカ機動部隊であった。第四御楯特攻隊として、八月九日、十三日、そして十五日は二時間後に降伏するとも知らず、午前十時十五分に出撃した。出撃させられたのは、若い予備学生出身の谷山中尉以下十六人と、予科練同期生四人であった。

帰りの燃料はタンクにないのに、飛び立つ時の顔を知っているのは私だけだと思っっている。命令が来るまでは死にたくないと言った昨日までの、「生」に拘わった「人間の顔」から、全く別人の『貌』に変貌しているのだ。泰然自若として、真っ白な歯を輝かせてニコリ微笑んで翔んでいった。無念残念。合掌。

お国のために

鳥山 進

私は昭和五年生れの七十六歳です。私が一歳の時、十五年戦争が始まり、私は戦争と一緒に成長しました。大阪で袋職人をしていた父に、名古屋市港区の住友重工業へ徴用（嫌だと言っても無理矢理、商人や職人を軍需工場の工員にさせる法律）で父は単身赴任しました。しかし、徴用期間が長引く気配と、戦争が激しくなるので、家族一緒に暮らそうと、住友が用意した社宅へ大阪から引越しました。国民学校高等科二年生の私は、西町国民学校（現〓日比野中学校）高等科二年一組に編入しました。

高等科二年生はクラス四十五名で三クラスでした。全員、学校へ行かず、家庭から直接、飛行機を製作している南部三菱重工業へ工員として働かされていました。仕事は五人一組のチームを組んで、ヤスリで鉄を削るのです。私は、始めてなので十日間見習い訓練を受けました。名古屋の学校へ転校してきてから、一度も、教科書もノートを開いたこともなく、生徒として学校へ行ったことがないのに、学校は空襲で消失してしまい、卒業式もしませんでした。

先生は、「君たち男の子は、早く大きくなって、立派な兵隊さんになって、お国のために立派に戦かわなければいけない。」と、教え、勉強よりもお国のために働いて、大東亜共栄圏を築く役に立のは、学校で本を読むより大切で、早く、大東亜戦争に勝つのだ。と、一生懸命働きました。私たち生徒は、日曜日は休みでしたが、工場の人達は、二週間に一回が休みだった。毎日のラジオ放送は、日本軍は連戦連勝で勝っているのに、戦争がちっとも早く終わらないし、その上、ご飯も代用食になるし、作業服も貰えなくなるし、お父さんのような年の工員さんも兵隊さんにされて、老人が徴用工で来て、労働力が落ち、生産出来ないことが、僕達生徒にも判るようになりました。

日本は、神の国神国だから、神風が吹いて戦争に勝つと、教えられていたのに、昭和十九年十二月七日、午後一時三十六分大地震が発生。工場の地面が波のようにうねり、工場の半分が倒壊した。さらに、地震は追い討ちのように、一月後の一月十三日午前三時三十八分襲ってきた。工員さんも、生徒も地震や空襲で死んだが、誰も、本当のことは言わなくなっていた。昭和二十年一月になると、学校は、卒業だから四月から、働きに行く会社を決めるようにと、連絡があった。私は、父が住友で働いているのと、住友の社宅なので、住友に決まり、二月一日から住友の教育課勤務になり、屋根に造った見張台から、名古屋城、熱田神宮本殿が空襲で燃え落ちるのをこの目で見た。戦争は御免です。

★世情が騒がしい昨今、今年も十二名の諸兄姉から、貴重な戦時体験談をお寄せいただき、有り難うございました。

★本年も昨年同様、東郷町立諸輪中学校のご協力を頂き、六名の生徒諸君が祖父母の戦争体験談を、まとめ推考し寄稿。別の三名の生徒諸君が、祖父母の戦争体験談を、語り継いで下さいました。

★後、数年もすると戦争体験者が皆無になる今こそ、《若い世代へ語り継ぐ》大切さに取り組む、東郷町立諸輪中学校に感謝と敬意を表明し、私達の励みとさせて戴きます。

★今も、戦争やテロがあり、毎日大勢の人が犠牲になった報道を見聞しています。戦争で得られるのは『憎しみ』だけです。苦しみの連鎖がいつまでも尽きません。

★戦争の悲惨さを知らない人達が、憲法九条を、戦争をするようにしようとしています。この人達は戦争になっても、戦争には行かないようして、行かされて死ぬのは私達です。

★私達は、戦争はダメと表明した日本の憲法を『世界の宝』だと誇りを持って発信しています。憲法を守り日本の国が二度と戦争をしないことを願い、行動しています。

★皆様方の応援を受けて、地球上から戦争がなくなる日まで、戦争の愚かさを語り継いでいく所存です。戦争体験者が皆無になる今、この、庶民の戦時体験記録集は貴重な戦争資料であり、読み継がれていくことを願ってやみません。

戦時体験記録集（第十三集）

編集・印刷・発行 戦争体験を語り継ぐ会

発行年月日 平成十八年七月八日

発行部数 百五十部